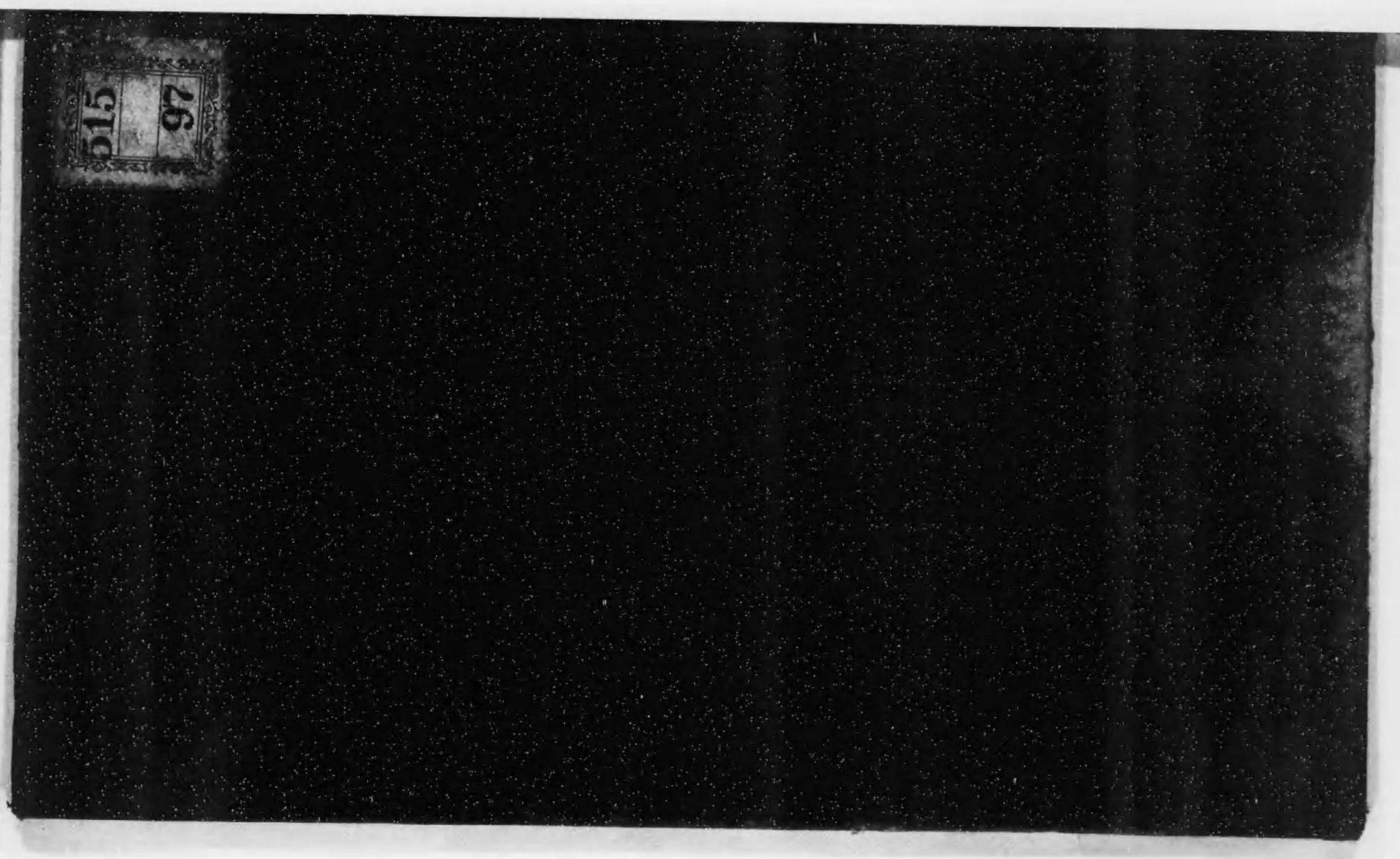
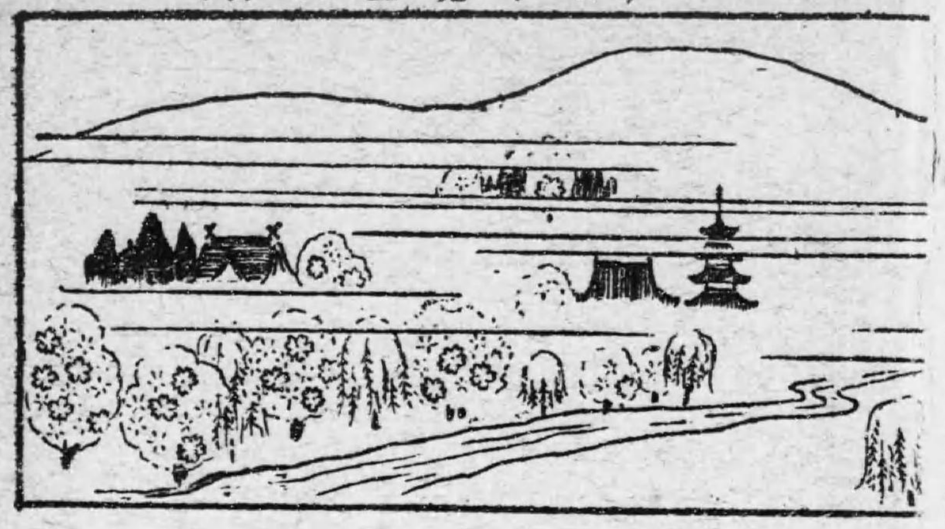
5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6


515
97

（日本児童文庫）



趣味の地理

名所と史蹟

太郎多葉著

日本出版社

趣味の地理

名所と史蹟

葉多默太郎著

日本出版社發行

はしがき

わが國の古戰場や舊蹟の中で、國史上有名なもので、且つ興味の多い物語をこゝに選んで載せました。

そして一つ一つに就いて地理的所在を明らかにし、史蹟をあはせて一つの纏つたお話に仕立て、地理と國史の連絡を計りました。

その話題は、勿論史實から採りましたが、すべて耳新らしいものを選び、教科書に現はれてない事蹟や有樣を趣味の中に覺えられる樣に書きました。

大正十三年仲春

著者識す

目次

【1】天の窟戸……（天照大神）……一
【2】高千穗の峯……（瓊々杵尊）……七
【3】橿原神宮……（神武天皇）……一二
【4】吉備津神社……（吉備津彦命）……一九
【5】伊勢神宮……（皇宮、神宮の別）……二三
【6】宇倍神社……（武內宿禰）……二七
【7】高津神社……（仁德天皇）……三三
【8】太宰府……（菅原道眞）……三六

【9】白峯の陵……（崇徳上皇）……四一
【10】伊豆大島……（源爲朝）……四八
【11】嚴島神社……（平清盛）……五六
【12】宇治平等院……（源頼政）……六三
【13】富士川……（平維盛）……七三
【14】粟津ケ原……（木曾義仲）……八一
【15】一の谷……（平敦盛）……八九
【16】屋島……（那須與一）……九八
【17】壇の浦……（平氏滅亡）……一〇六
【18】鎌倉……（源頼朝）……一一三

【19】笠置山……（後醍醐天皇）……一一九
【20】般若寺……（護良親王）……一二五
【21】吉野山……（村上義光）……一三〇
【22】金剛山……（楠正成）……一三八
【23】桶狭間……（織田信長）……一四七
【24】川中島……（上杉、武田の合戰）……一五四
【25】本能寺……（明智光秀）……一六三
【26】賤ケ嶽……（豊臣秀吉）……一六九
【27】名護屋城址……（加藤清正）……一一五
【28】大阪城……（德川家康）……一八〇

目次

【29】櫻田門……（井伊大老）……一八九
【30】熊本城……（西郷隆盛）……一九七
附錄　史績縣別表……二〇九

趣味の地理

名所と史蹟

葉多默太郎著

【1】天の扉戸

名所

天の扉戸は高天原に在ると云ふのだがその高天原は何處を指して云つたものか種々の異説が有つて判らない、大和の葛城山にその名が遺つてゐるかと思へば、又常陸國にも高天原と呼ばれて

ある所が有る。又一説には遠く九州の日向に、高千穂村と云ふのが有るが、その附近にも高天原と稱せられる處が有るから多分其處だらふとも云ふ。かと思ふと否々高天原だの天の窟戸等と云ふのは何れも天上界の話で、地上にその遺蹟を求めるのは間違だと主張する説も有つて、事實未代の遺蹟のやうに、此處だ彼處だと定める何の證據も無いのです。

序だから書いて置くが、大和の香久山

にも天窟戸と呼んでゐる處が有る。

史蹟

——天照大神——

天照大神は御名を大日霎貴と申し奉るのですが、その御威徳高く、萬民をしろしめすこと、恰度天上の日輪が萬物を照らす如くで有つたから、日の神又は天照大神とも申すやふになつたのです。

大神は高天原にまし〳〵て、人民に田畑を作る業や、織物等の手藝をお教へになり、一方齊殿を建て、先祖の神々〳〵を御齊り申してゐました。

大神はそんなに至つて穏かな、慈愛こ眞こに富み給ふ

た方でしたが、その御弟素盞嗚尊は、御兄神に似もつかぬ荒い亂暴な御性質で、事々にお兄神の意に染まぬことばかりいたして御機嫌を悪くしてゐましたが、或る時大神が衣を織つてゐ給ふ隙をうかゞひ、その屋根に登り馬の剝ぎ皮を突然に投げられたので、大神は大變に吃驚なさつて直ぐに天岩窟に身を秘め、しつかりと戸を閉ざし給ひました。

處がそれと共に天上天下忽ちに眞暗闇になつて、晝と夜の見さかひがつかなくなりましたので、神々は一方ならぬ御心配、早速天安河原に會合いたしまして、さてどうしたものか、と御相談を初めましたが、一つい〳〵思案が出來上りました、で御一同はその仕事にとりかゝられます。

先づ八咫の鏡と八坂の曲玉とを作り、それを榊の枝に懸けて岩窟の前に立て、それから燎火を焚いて、その周圍には、音樂の上手な神々が座り、一、二の三で賑かな音樂を始めました。又それと共に天鈿女尊はその曲につれて、ダンスをなすつたものだから、その面白いこと、賑かなこと〳〵云つたら、まるでお正月とお祭とが一緒になつたやふで、

「やんや〳〵」と云ふ神々の囃し聲や笑ひ聲は天をも震はさぬばかり、其處で大神は、

「何が始つたのか知らぬ、素適に面白そうだなー。」と思つて、少しばかし岩戸をお開けになり、そつと覗かれました。すると横に隱れて待つてゐた力の強い手力雄命はいきなりその戸に手を掛けて引き開けたものですから、今迄の闇は忽ち追ひ退けられて、天照大神の御光は再度天上天下に滿ち充ち、萬物は喜び祝ひました……と云ふお話、そして是れが神樂の始まりだそうです。（完）

【2】高千穗の峯

名所

鹿兒島縣——

高千穗の峯は先の高天原とは違つて、此所だらうと云ふ推定がついてゐる、九州の日向、大隅に亘つて聳えてゐる霧島山がそれで、此の山は東嶽と西嶽との二峰からなつてゐて、天孫瓊々杵尊のお下りになつたと云ふ高千穗の峯は西嶽の方を指して申すのです。

霧島山は鹿兒島の北岸の小驛國分の近くで、國分は昔から煙草の産地として名高い。

又伊奘諾、伊奘册之神、天の浮橋から下り給ふて突き差したと云ふ、天の逆矛は東嶽の山頂に遺つてゐて、今尙神治しめす國の歷史を語つてゐる。

史蹟

天照大神は、御弟素盞嗚尊の御子、天忍穗耳尊を養ひ給ひて御子となされた。そしてその御子が瓊々杵尊で、

——瓊々杵尊——

大神は孫にあたらせらるゝ、此の若い尊を殊の外愛しみ給ふた所から、或る時お傍に召されて、

「豐葦原瑞穗國は、私の子孫が治める地であるから、お前が行つて王となり、政事を布くがよい。」と御命じになり、更に、

「天地の有る限り、お前の子孫に王位は續いて、汚されるやふなことは無い。」と御約束をなさいました。

それから八咫鏡を賜はり、

「此の鏡を見るのは、私に逢ふのだと思ふがいゝ、これは私の片身だから大切にいたして、子々孫々に讓り、王

位の印となさい。』と仰有つた。鏡の外にその時、叢雲劍と八坂瓊曲玉とを添へて下さつたが、此の三つを後に三種の神器と申す樣になりました。

其處で天孫は大神に御禮を申し上げ、お暇をして御家來衆と共に高千穗峯に降り給ふたのですが、ごうしたものか下界は一面に夜かそれ共、海の底にても入つたやふで、何一つ見えなかつたので、瓊々杵尊は御家來の勸めに從ひ、稻穗を拔き籾をさつと投げました。すると忽ち日は輝き天は晴れて、美しい海山が一目に見渡されるやふになりましたので、此處を高千穗峯と名附け給ひました。

尊の御一行は、是を猿田彦命がお迎へ申し、良い地を撰んでお住居を造りましたが、是を高千穗宮と申す。

附近に彦火々出見尊を祀つた官幣大社、鹿兒島神社が有りますが、此の處が高千穗宮の趾だとも云ふことです

(完)

【3】橿原神宮

名所

神代は日向で、それから後の歷史は大

——奈良縣——

和が中心になつてゐる、日本國中で舊蹟名所の多い點に於て此國を中心にした近畿一帶を凌ぐ所は地に無い。

吉野の北方畝傍山の東北のあたりに、神武天皇の御陵が有り、更にその南十町程の所に日本で一番初の皇居の趾が有る、神武天皇の御住居なさつた處で趾には同天皇及皇后の神靈をお祈りしてゐるが、それが卽ち橿原神宮です。

史蹟

——神武天皇——

瓊々杵尊の御曾孫が后の神武天皇で當時狹野命と申上

げてゐた。命は性質勇敢に渡らせられるが、胸に大きな志を抱かれて兄君五瀨命と共に日向を船出して、東方の國々を御平定に向はれました。

御船は瀨戸內海を通過いたしたのですが、何を云つても古代のことで、さまで大きな船も無かつたに違ひないのですから、並大抵の御苦勞では有りませぬでしたでせふと思はれます。事實その途路安藝や、今の岡山縣の兒島半島のあたりに御上陸になり、各七八年間宛も御滯在になつてゐました、それは兵員を募集したり、兵器を作つたりする爲に費した年間でありました。又九州の筑紫

では、その邊にはびこつてゐた賊兵を討ち從へさせた由も傳へ遺されて居ます。

そしてやつと難波、今の大阪灣に御到着いたした時、命をお迎へ申したのは誰でせふ、それは當時大和地方に最も勢力の有つた長髓彦と云ふ土族で、皇軍の東征を聞き、之を防ぎ戰はふ爲、戰鬪準備をして大阪灣に望まふとしたのですが、早くも上陸をして大和へ向つた皇軍と生駒山の麓で衝突をしました。だが此の險しい峠では味方は地理に通じなかつた爲、慘々賊原になやまされて惡戰苦鬪、遂に司令官五瀨命は流れ矢にあたつて重

傷を負はれると云つた仕末で、第一戰早々少からぬ痛手を受けて、兵士の意氣も沈又み切つて了ひました。

がその時狹野命が、

『西から東へ向つて戰ふのは太陽に逆つてゐる、吾等は日の御子で有るから、太陽の登ると共に東から西へ向つて進擊すれば、きつと勝つに違ひない。』と云ふ事を仰有つたものですから、全員の志氣は再度擧がり、一先づ兵を纏めて船に乘り、紀州を南に廻つて、荒阪津、今の新鹿村に上陸し、丹敷戶畔と云ふ、此の地方の女酋長を攻め從え、茲を根據地として、漸時に伊勢方面迄も斬りな

びかせ、皇軍は瞬く間に大變な勢力になつたので、此處に大和入りを企てた。

五瀬命は紀州沖で御薨去なさつたので、狹野命が代つて司令官になられ、不案内の險岨を一方ならぬ難澁を嘗めつゝ踏み越え、八十梟帥、土蜘蛛等と云ふ諸族と戰つて、是を味方につけ、愈々めあてにしてゐた長髓彦と對陣しました。

長髓彦は、是も矢張り日の神の裔にゐます饒速日命を奉戴してゐたのですが、命は既に日本國中は瓊々杵尊の御子孫である狹野命がお治めになる筈だと知つてゐましたから、

「此度西から征めて來た皇軍に降服して、その旗下に從はふではないか。」と仰有つたが、

長髓彦はそれを聞き入れませぬでした、そして遂に戰が初つたのですが、戰央ばの頃何處からか一羽の金鳥が飛んで來て狹野命の弓に停つた、その黃金の光はまるで太陽を見るやふで、賊軍は皆その光輝に眼を射られ、心おの〳〵くばかりで矢も交へられなくなつて來ました、その機こそと皇軍はまつしぐらに突擊をしましたので、さしもの賊兵も或は仆れ、或は遁れして全く陣は崩れて了

ひました。その上に更に味方にとつて目出度いことには饒速日命は、幾ら去つても勸めに從はぬ長髓彦を刺し殺して置いて、皇軍へ降つて參りました。

これで大和一圓は全く皇威の下に頭を垂れた譯で、狹野命は一先づ畝傍山の麓の橿原と云ふ所を都と定め給ひ宮殿を造つてお住ひになると共に、人皇第一代の御卽位の大典を擧げられましたが、後に此の年を我が國の紀元元年として御威德を記念いたしました。

御在位七十六年間、御年百三十七歲にて崩じ給ひましたが、その御英名は天地と共に、無窮に萬民の敬ひ畏み

奉るところで御座ゐます。（完）

【4】吉備津神社

——岡山縣——

名所

備前の眞金村、備中との境に近い山中で、其處に安藝の嚴島神社と並び稱せられる程、宏大莊麗な社で有る、これが吉備津彦命を祀つた官幣中社吉備津神社です。

又此の社の背後の山頂に命の墓所が有

ります。

吉備津神社は岡山市の西北、一の宮と云ふ小驛の近くで、交通の便がよいので、參拜者が多い。

序に岡山市には宇喜多氏の改築した烏城が有り、後樂園も又有名だ。

史蹟

——吉備津彦命——

第十代崇神天皇は、都から遠くて敎化の行き屆いてゐない遠方の地へ、時の皇族方四名を選んで御差遣になり津々浦々迄、皇室の御威德を知らしめ、併せて是を敎化

なさらふとなさいました。

此名譽有るお使者は、左の四人の方々で、後世是を四道將軍と申上る樣になりました。

大彦命—武渟川別命

孝靈天皇—孝元天皇—開化天皇—崇神天皇

吉備津彦命

□—丹波道主命

そして吉備津彦命は西海道へ

大彦命は北陸道へ

武渟川別命は東海道へ

丹波道主命は丹波へ

と云ふ風に手別をして御巡回になり、各地を鎭め給ふて皇威を布き、その地に留まり給ふて、永く守護の役を果されました。

吉備津彦命が西海一帶の地を鎭護なさる爲に、お撰びになつて居城となし給ふたのが、今の吉備津神社のあたりだと思はれます。（完）

【5】伊勢神宮

名所

——三重縣——

伊勢の國、五十鈴川の上流で、神路山の麓に伊勢大廟が在る、今では此處は伊勢山田市になつてゐて鐵道の便も良く、四時參拜者が絶えぬ。

大廟は內宮外宮の二社に分れてゐて、內宮を皇太神宮と申し、天照大神をお祀してゐるので、御靈代は彼の八咫鏡です。そして山田驛から五十町ばかし、五十鈴川を上つた聖淨の地に在ります、又外宮は雄略天皇の朝に、丹波の豐受大神宮を、此の地に遷し奉つた

ので大神宮に對し、此れを外宮と申すやうになりました。で、五穀豐作を掌る神です。

伊勢大廟へは今でも國を擧げての出來事、例へば戰爭などの際には、皇室御自ら御參拜になつて御報告や加護の祈願を遊ばす外、御即位等の御大典には又必ず御報告をなさいます。

史蹟

第一代天照大神以降、彼の三種の神器は、代々の天皇が御受けつぎになつて、皇居に安置いたして有つたので

――皇宮、神宮の別――

すが、第十代崇神天皇は眞に敬神の心の深い御方で、神威をけがすやふな事が有つては、と御心使ひになりまして、八咫鏡と、叢雲劍の二つを大和の笠縫村に遷し、皇女豐鍬入姫命に祀らしめ給ふことにいたしました。

そして鏡と劍とは、別にそれに似たものを造らせ、それを八坂瓊曲玉に添へて、後歷代の天皇に御讓りになり皇位繼紹の御印となされました。

次の垂仁天皇も又敬神の御心深く、御鏡と劍とを御祀りするやふに、皇女倭姫命に御命じになりましたので、姫は更に神宮として、最も良い所を御探しになつた末、

淨らかな流れと云ひ、山の姿、樹の色と云ひ、全てが神々しくて聖らかな土地を見付け給ふたのが五十鈴川の邊で、直ぐに此處に神宮を造り右の神器を安置してお祀り申しました。

それが垂仁天皇の二十五年で、紀元六百五十六年にあたります。

以後二千年、我が日本の國を治給ふた天皇は申す迄無く、國民一同此の伊勢の大廟を敬ひあがめ、神威は赫々と四隣を壓して今日に至りましたことは、眞に畏き極みであります。

明治天皇御製

昔より流れたえせぬ五十鈴川
なほよろづ世もすまむこそ思ふ

とこしへに　民安かれこ祈るなる
我が世を守れ伊勢の大神

【6】宇倍神社

名所

山陰鳥取市の南東一里半の地點に國府

——鳥取縣——

と云ふ所が有り、其處に武内宿禰を祀る宇倍神社が有る。

社殿の圖は現今の五圓紙幣に宿禰の像と共に印刷されて有ります。

又大和の室村と云ふ僻村に、室の墓と呼ぶ古墳が有るが、これは宿禰の墓だと云つてゐるが又一說には宿禰は年三百歳にも達して尙ほ盡きぬので因幡の宇倍山に籠り、それきり姿を現はさなかつたので、その時脫ぎ捨て、行つた沓を埋めて墓となし、後に社殿を建て

、祀つたが、此の宇倍神社だとも云ひます。

史蹟

——武内宿禰——

應神天皇が皇太子にゐまして、豊田別尊と申し上てゐた時分、日出度く王子をおもうけになりました所が、何處からか木菟が飛んで來て、産殿に飛び入りましたので尊は翌朝宿禰を召して、この話を聞かせ、

「何の兆だらふか？。」と、お尋ねになりました。すると宿禰は、

「これは又不思議な事が有るもので御座ゐます、實は」

こ膝乗り出す。

『私の妻も昨日子を産みましたが、その時一羽の鷦鷯が飛んで參りまして産室に入りまして御座ゐます、が此れはきつと何かよい兆に相違御座ゐますまい。』

と申す。

で尊はお喜びになり、

『ではその鳥の名を取り交はせて、子の名にし、後々の記念にいたそう。』とそう仰有つて王子には大鷦鷯の尊と のお名を附けられ、宿禰の子には木菟宿禰との名を給はりました。

それはさて、此武内宿禰は、二百年間六代の朝廷に續き仕えて、忠勤を勵んだと云ひ傳へられて居りますが、人の壽命はそんなに永い筈はないから、多分子々代々同氏同名を名乘つてゐたのを、後世に是を一人だこ思つたので有らふこ云ひ、又は年代の計算違ひで二百も三百も生きたことになつてゐるのであらふ、等色々な說が有つて定まりませぬが、兎に角長命をした人には違ひないこ思はれます。(完)

【7】高津神社

名所

——大阪府——

高津神社は大阪市の南區に在り、仁徳天皇を祀り奉る。

天皇の宮は今の大阪城の丘に在つたと思はれます。

史蹟

——仁徳天皇——

仁徳天皇は御卽位遊ばすと、難波の高臺に、高津の宮を造らせ給ひましたが、皇居とは名のみの、頗る質素な

茅葺の建物で、毎日只政事にばかり御專念になり、早や三年を過し給ふた或る日、皇居の高臺に登りて、遠近の民家を望まれたが、竈の烟が少しも登らないので、

「これは民人の貧しい印だ。」と御心配になり、

「民の貧しいのは王の德の足らぬ爲だ。」と仰有つて、それから后三ケ年の間、稅金を免ぜられました。

その間、民人は一方には課稅が免れるし、一方には天皇の御仁心に感激して、一層勤勉に働きましたので、餘程豊になりましたけれど、その代り皇室は御費用が足らないので、宮居も荒れるにまかせましたので、雨は洩り

月は覗いて御寢所を照す程になりましたが、天皇は少しも心に留め給はず、しきりに立ち登る民家の烟に眉を開かれ、

『あゝ、我は此んなに富んだ。嬉しい事だ。』

と喜ばれる、皇后は不審に思召して、

『此程皇居は荒れ、萬事に御不自由遊ばして居給ふに、何故左樣な事を仰有るのですか。』と尋ね給ひました。

『王は民の本、民は又王の本です、民の富んだのは王が豊になつたのと同じことではないか。』

と御說明遊ばし、

高き屋に登りて見れば烟立つ
民のかまどの賑ひにけり

と一首の歌をお詠みになりましたので、並居る臣下共、只々有難さに涙をこぼすばかりでした。

その年、民人等は、

『こんなお宮殿の模樣では、餘りに勿体無ふ御座ゐます から。』と云つて改築しやふとしましたが、ごうしてもお承知なさらず、遂にその翌年漸くお許になつたのでした

此の天皇の御心が、代々二千年我が國の太陽として國民にのぞみましたので、國民も天皇を敬ひ且つ慕ひ上げ

て茲に一團となり、世界に例のない堅固な帝國として續いて來たのです。（完）

【8】太宰府

名所

——福岡縣——

福岡市から二日市に至る間には、太宰府の舊跡が至る所に有る。

二日市驛から東北二十餘町の地點に、名高い天滿宮が有る、云ふ迄もなく菅原道眞の靈を祀つた社で、その附近に

太宰府の址が有ります。

天滿宮はその結構、眞に壯麗を極めたもので社殿の前庭に梅の樹が有るが、これが有名な飛梅で、道眞都を去る時

東風吹かば匂ひよこせよ梅の花
主なしとて春な忘れそ

と云つて朝夕大切にしてゐた梅の樹に別れを惜しんだのだが、後に此の梅空中を飛んで筑紫に至り、配所に此不幸な主人を慰めたと云ふことです。

史蹟

——菅原道眞——

配所に遷されてから后の道眞の話は悲しいものばかりで此處では都に居た時の逸話を一つかゝげて、その仁心を偲ばふと思ふ。

時の主上醍醐天皇は、未だ御年も若く活潑でゐらせられたので、よく彼方此方と幸遊ばされた、がその度毎に沿道の民人は皆業を休んで御送迎申し上げてゐました。

右大臣道眞は民の爲に氣の毒に思ひ、何時か機が有れば、お諫め申さうと決心をしてゐました。

所が或る日、何時もよく幸遊ばす神泉苑と云ふ處に御宴を催してゐられた時、お庭に一羽の白鷺が舞ひ下りて

泉水の魚をしきりに狙つてゐました。

主上はそれを大變面白く御覽になつてゐられたが、つと侍臣を顧て、

「あれを捕へて參れ。」と仰有つたので、

「畏りました。」と立ち上り、鳥の近くに進み寄りますと鳥は人の氣配に飛び立たふとい たしました。

其處で侍臣が、

「主上の勅命だぞ、動くな。』と云ひますと、鳥はそのまゝ羽をおさめて首を垂れ、靜に待つてゐるので侍臣が捕へて獻上申しますと、主上は大變感心遊ばし、御自ら筆

とられてその純白の翼に　――鳥王――　と認め給ひ、五位の位を授けて放ち給ひました。

その時道眞は徐かに御前に進み、

「御覽遊せ、鳥さへも勅命にはあの通り畏みて從ひ申します、まして人民共は皆主上を敬ひ奉り、あがめかしこみてゐるのですが、幸の有る毎に、業を休んでゐるので、此頃の樣に度々になりますと、全く業に手が付かぬであらふと存じます、ごうか下民の有樣を御察し下さいませ」と眞誠を表はして諫め奉りますと、元々憐愍深く御賢明に渡らせられる主上は道眞の忠心に感じ、民の上を思遣

り給ふて、その后は宴遊の事を再度仰せ出しになりませぬでした。

因に鷺を五位鷺とも云ふのは、この時より始まつたことです。

【6】白峯の陵

――香川縣――

名所

崇德上皇の御陵は香川縣の中央部海に面した白峯山に在り、このあたり瀨戸內海中最も島の多い所を臨んで風光絕

佳、附近に塩田が有つて塩を多く産す。
讃岐線鴨川驛の地一里半ばかりで、山上に白峯寺が有る。又此の驛から南十町程の處に、上皇の行在所木の丸御所の蹟が拜せられる。

史蹟

保元の亂に、志破れ給ふた崇徳上皇は、僧信西等の爲に讃岐に流される事になりました。

――崇徳上皇――

京都で召されたお船は淀の川を下つて、鏡て浪花で海に出で、それから悲しい日數を重ねて須磨、明石の沖も

涙のまに〳〵過させ給ひ、灘に月を御覽じては、都に居給ふ折の月見の御宴を思ひ起し、新らしい嘆に顔もえ上げ給はず、淡路の島に鳴く千鳥をいと淋しく聞き給ひながら、漸う定められた讃岐の國へ參りました。

そして取り敢えず御休みになつたのは、今の高松の西北海上の一孤島、眞島と云ふ處でしたが、間もなく讃岐の國深く、松山と申す處に遷され給ふて、其處に三ケ年の間はかない起伏をなされましたが、それから更に國府と云ふ處に新に行在所を設け、此處へ遷されました、それが木丸殿ですが御宮ごは名ばかりの、雨風繁く、月も

洩るこ云つた、眞に粗末な御所で、此處に朝夕を過し給ふ上皇の御心根は、思ふもおいとしく、靜に琴を彈じてせめてもの心やりこなさつてゐられました。

その頃上皇は佛敎に歸依し給ふた處から、寫經のこことを思ひ立ち、三年の月日を費して爲し遂げましたので、これを鳥羽の安樂壽院に奉納せられたい旨を書き添へて都に送られました。

併し、彼の僧信西は此のいとかしこき御申し出をさへ無慚に抗んで、

『御心に添ひ難く、お望の程覺束なく候。』

こ云ふ返書を添へて、永年心血をそゝぎ、心を籠めて作られたものを、何のわきまへもなく、送り返しました。

その時上皇樣の御心の中は例へやふもなく、一日一夜口惜涙に暮れ給ひ、その果は世を恨み、人を呪つて身をもだえ、

『此の上は、惡鬼となつてでも、怨を報ひてやらふ。』こ

東、都の方を睨み、齒を喰ひしばつてゐ給ふたが、遂に此の大寫經を海の底深く、恨こ共に沈めました、それから后は一切髮も剃らず、髭も伸びるにまかせ、食物も、日毎に減じましたので、暫時の間に頰の肉は落ち、眼は

くぼみ、形相物凄く、昔の御姿は、何處にも殘つてゐない樣に見受けられました。

都では、

『上皇は恨みのやる瀨なく、遂に此の世ながらに、天狗こなり給ふた。』等云ふ不吉な取沙汰が行はれたので、人々は恐れ戰いたが、中に以前上皇に仕えてゐた是成こ云ふ人、御樣子の程を見奉らむと、祕かに都を立つて讃岐に渡り、御所のあたりを彷徨ひましたが、警護が嚴しいので御宮近く行く事が出來ないので、或る夜御庭に忍び入り、有り合ふ木の片に、

朝倉や、木丸殿に入りながら、
君に知られで歸る悲しさ。

こ云ふ一首を書いて置きました。

その翌日警護の武士が是を怪しみ、上皇に御目にかけましたので、なつかしい家來が遙々訪ねて來たことを知りましたが、淺ましい姿を見せるのをお嫌になつて

朝倉や、唯いたづらにかへすにも
釣する海士の音をのみぞなく、

この御返歌をなされたのみで、お逢ひになりませぬでした。

そして憤と怨みと、悲しみの中に九年を過させ長寛二年八月廿六日、御年四十六歳にて崩御遊ばしました。

役人共は御遺骸を御所の北方、白峰山で茶毘の烟となし奉り、そこに陵を築きました。

【10】伊豆大島

名所

大島は伊豆の國、伊東の町から二十海里ばかし離れた島で、伊豆七島の中、最も大きく面積約七十二方里ばかり有る。

此の島の島廳の有る所が新島村と云ふ村落で、此處に源爲朝が居を構えてゐたと云ふ址が有る。

昔から流し人と云へば、直ぐに大島を思ひ出す程で、罪人の流し場所として有名だ。

史蹟

保元元年、源爲朝は父爲義に從ひ、崇徳上皇に組し奉つたが、一夜白河殿の戰に、後白河天皇の御味方義朝、清盛等に敗られ、爲義は斬られ爲朝は關白忠道の骨折で

命だけは、助かり、伊豆の大島に流された。

武力に優れ、志の大きかつた爲朝は、大島に來ると間もなくその力量を現はして、附近の五島を打ち平げ自ら王となつて政事を施しましたが、そう、此うして十年の歳月は夢と過ぎ、爲朝は二十八歳になりました。

所が此の伊豆七島は當時狩野介茂光と云ふ人の領地であつたのですが、流し人の爲朝があたかも王である如くに振舞つてゐるのを知つて驚き、此の由を京都の政府へ申し出ました。

『流罪人爲朝は大島に王廊を構へ、數十隻の軍船、數百

人の兵隊を用意し、そのし上鬼界ケ島の鬼共を僕にしてゐるとの事ですが、これは申す迄もなく、朝廷へ逆らふ爲の準備と存ます。』と云ふのです、で時の大臣共はこれは大變と膽を潰して、直ぐに爲朝討伐の命令を下しました

其處で伊東祐親、北條時政等は五百騎の强者を二十餘隻の軍船に乘せ、白波を蹴つて大島へ押し寄せて來ました。

『怪しい船が見え申す』と島民が爲朝の舘へ注進して來ました。

『商船では御座りませぬ、旗押し立てた兵船で御座りま

す。」

で色を變へた爲朝は時を移さず濱に出て沖合遙の方を望み見ますこ、旗差物を風に飜した兵船十、十五、二十餘、

「さては我を討たん爲の軍船ならぬ。」

「兵共召し集め、直に戰の準備をいたしませふか」と家來は騷ぎかける、

「いや待て者共、我が武運もこれ迄だ、朝廷に向ふ矢は持たぬ、勅命なればいたし方はない。この上島民を無役に殺し、國を亂すは我が心でない、兵士共は早速名々の

島へ歸る準備をいたせ。」

觀念をした爲朝は手許に集めてゐた重寶、物の具を皆兵士等に分け與へ、それ〳〵立ち。

の大弓を持つて濱邊にすつくと立ち。

「今生の名殘に、最後の手なみを見せて、官兵を驚かせてやらふ。」と矢を交へて岩角に踏張り、きり〳〵こ滿月の如くに引き絞つてひやうこ射て放す、矢は唸つて海面を疾り、狙ひたがはず前に進んで來る兵船の腹を射通したので、忽ち水が入つて兵卒共は大狼狽、續く船々、

「さても、さても。」こ驚き果れて暫時はためらつた。

が爲朝は元々是を防ぎ戰ひ、惱まそう心ではなかつたので、自分の腕前の昔に變らぬのを知ると、さも滿足そうに高笑ひして、其場で切腹をしやふとしたが、

『あなた程の偉丈夫を、こんな島の土にいたすのは殘念です、どうか生き永へて、その志を何處かで遂げて下さいませ。』と云ふ妻のいさめに、

『さらば永の暇だ。』と立ち上り、有り合ふ小船に打ち乘つて、祕かに此の島を遁れました。

それを見送つた妻は驚て館に歸り、子供達を刺し殺し館に火を放つて自らその猛火の中に飛び込んで自害して

果てました。

が一方爲朝はそれから荒波に弄ばれながら、幸に瀨戸內海に入り、讃岐の白峯、即ち崇德上皇の崩御遊ばされた跡を弔ひ、九州に歸つたが、五年の后當時源氏に代つて世に暴威をふるつてゐた淸盛を討たう爲、再度都に向つて船出したが、たま〳〵暴風雨に遭ひ、波のまに〳〵流されて琉球の島に漂着し、遂に此の地で死んだと申します。

又、爲朝は伊豆大島で、妻や子と共に自害して果たとも云ふ說も有りますが、何れ共斷定は出來ません。（完）

【11】嚴島神社

名所

山陽線廣島の西、宮島から、小汽船で十五分程の所に嚴島が有る、廣島灣内の島の一つで、東西三十町。南北二里半の面積を有し、その北岸に名高い嚴島神社が有ります。

幾棟の社殿は多く水中に基礎を置き、華麗な回廊でそれ等を連結してゐる、結構實に壯麗を極め贅を盡し、流石に

——廣　島　縣——

權勢並びなく、天下を我物顏の清盛ならではと思はれる。

船着場のあたりが後世毛利元就が、西六ケ國の大名、大內氏の奸臣陶晴賢を討つ時、本陣を置いた所である。

尙嚴島は此の社殿外に、天然の風光にも秀れた所多く、全島を一大公園と云つて恥しくない。

史蹟

從一位太政大臣と云ふ、位階の最上を得、娘が時の天皇の中宮となり、一門總て榮進して公卿の列に入り、殿

——平　清　盛——

上を我が物顔に横行してゐた平清盛は、此れ程の身分になる前に、安藝の守で有つた所から、此の嚴島の奇勝を利用して、此處に一大社殿を造つた。それが嚴島神社で當時一家一門を從えて此の社に詣でた時、歡樂が盡きぬに、日が西の山の端に沈みかけたのを殘念に思ひ、清盛自ら廊下に立つて扇を展き、

『我は清盛なり、日も我の命令に從つて今一度中天に登れよ。』と云つてあふぎ返すこと。太陽は再度空に逆戻りをした。……と云ふ話が有りますが、まさかにそんな事は有らふ筈はなく、

『日をも煽ぎ返そうばかりの勢だ。』と云ふ形容をそのまゝ本當の事の樣に、云ひなしたに違有りませぬけれ共、清盛の天をも怖れぬ横暴こゝに、天下のもの一つこして思ふまゝにならぬものはなかつた程の勢とをよく示した譯です。

後白河法皇は此の清盛の專横を怒り給ふて、私かに募兵を計り給ふたが、事露れて法皇樣迄押し込められそうになりました。

その時清盛の長男重盛が早くもそれを知り、急いで六波羅の清盛の舘に行つて、涙ながらに父を諫めたので、

清盛は不承〳〵ながら、

『私が惡かつた、許せよ。』と謝罪つた。

がそれでも尙心配なものだから、重盛は我が舘に歸ると直ぐに、

『一大事が出來たから、家臣は急に兵を調へて集まれ。』と云ふ布令を出しました。

物の道理を辨へ、仁心厚かつた重盛に心を寄せて、一朝事有る際にはその馬前に命を投げ出そうと思つてゐる兵が、京都の內外に澤山有つたものですから、忽ち の中に大軍隊が集まつて來て、何事かこひしめき合ひました

その時重盛は一同に向つて、

『今日は別に事は無かつたのだが、平時に居て亂を忘れまいとする心から、皆を試に集めたのだが、此んなに早く、此んな大勢が走せ參じて呉れたのは眞に嬉しい、后々何事の有る時には、又今日の樣に集つて欲しい。』と云ふ事を述べて、一同を返したのです。

が一方此の兵集めの由を聞いた清盛は、すつかり慄え上つて了つて、

『我が子ながら、重盛はごうも偉い奴だ、迂活な事をすると反而酷い目に逢ふかも知れぬ』と云つて、法皇樣へ

の軍備を解いて了ひました。

實際に重盛が兵を集めたのは、父に、

「あなたが若し法皇様に御無禮をなさるこ、私は法皇様にお味方申します、私には此れ程の兵が常に備はつてゐますぞ。」と云ふ事を暗に示して、暴逆を思ひ止めさせたいこ云ふ、忠こ孝この二道から思ひ付いた策略で有つたのです。

こんな忠義な重盛が居たらばこそ、平氏も事なくその權勢を保つ事が出來てゐたので、一度重盛が亡くなりますこ、忽ち清盛は横暴を極め、源氏の旗擧こなり、僅に

清盛一代の間勢をふるつたばかりで、あんなに早く平氏は滅亡して了つたのでは有りませぬか。

嚴島神社は、八百年昔の平氏の榮華を尙今日の人に語つてゐます。（完）

【12】宇治平等院

名所

京都から奈良へ至る奈良線に、宇治驛が有る、此の驛から五町ばかしで宇治橋に出る、翠の山を映して、いやが上

―京都府―

にも青さを加へた清水が、湧き立つやうに流れてゐて、夏秋の頃の秋めは又格別、少しく上流の山陰に宇治川水力電氣の發電所がある。又宇治一帶には良質の茶を産するので名高く、五月時分春日のどかな茶畠に、茶摘女の唄が聞ゆるのは又長閑。

史蹟

左大臣源某が此處に別莊を建て、宇治院と云つたのが始まりで、更に後に是を關白藤原道長が手入して別館と

——源　頼　政——

してゐましたが、その子賴道は寺院に改築して、平等院と名附けたのが、今見るそれなのです。

宇治川の先陣、あの賴朝の家來、梶原景時、佐々木高綱の二人が、名馬磨墨、池月を御して折から濁流渦巻き返す大河にざんぶと躍り込み、先陣を爭つたのも此のあたりでしたが、平等院に關係した物語と云へば、治承四年五月平氏と苦戰して此處に自害をした源賴政を持ち出さねばならぬ。

平清盛を初め一門郎黨に至る迄惡く榮華に耽り、權勢を賴みて人を人とも思はず、朝に夕に暴虐を重ねて、果

は、

『今は平氏の世ぞ、平氏にあらぬ者は人にあらず』と迄驕り、ともすると皇室の御心にさへもとる行が有つた。

時に源頼政と云ふ豪の者、後白河法皇の皇子以仁親王を奉戴して平氏の滅亡を謀つた。

が事成就しない間に顯れて平軍に襲はれたので、頼政は親王を三井寺に遷し奉り、更に奈良へ遁れやふこしましたが、奈良の僧兵は豫て親王方に心を寄せてゐたから、其處に行つて僧兵の援助を受けやふこしたものです。

がその途中宇治あたりに差しかゝつた時、追手の軍に迫

られたので、止を得ず親王を平等院に護り、宇治橋の橋板を落して對陣の用意をいたしました。

間もなく此の川に迫つて來た總勢三萬騎、主だつたる大將は、平知盛、忠慶それに續く武將の名々、蹄を鳴らせて差し掛つた。

が眞先に來る者の眼に宇治橋の橋板の落てゐるのが見えたので、急に手綱をかい繰り、

「止れ、止れ、橋が墜てゐる、橋が墜てゐる。」

と呼ばはつたのですが、何を云つても谿川の水のやふな勢で押し寄せて來たので、その聲も耳に入らず、尚もま

つしぐらに馳せ進んだので、

『あはや、あはや』と云ひながら先陣の二百騎ばかりは馬諸共、ざゝざつこなだれ込んで、水に流されて溺れるのも有れば、やつこ河下に這ひ上るのも有りと云つた大騒動、その中を平等院の方からは、強弓自慢の者が、狙ふては放ち、射ては交へ、引掛け追掛け射出したので、甲は破られ、鎧を通されて仆れる者も數知れず、猛りはやつた平軍も、出鼻を挫かれて思はずさつと左右に陣を開いた、大將共は氣が氣でない。

時に宇治橋をのそ〳〵と歩き渡つて出て來た大兵の武

士一人、見れば黒革縅の鎧着て、黒塗の太刀を腰に、冑を輕々と頭に頂き、大長刀を小腋に輕い込んでゐるのだが、聽て平軍の眼の前にすつくと立ちはだかり天も震えこばかり大音聲、

『我こそ、親王軍にそれ有りと知られたる三井寺の筒井明秀なり。』と名乘るが早いか、脊の弓を取り矢をかまえて、ぶつゝりと放つ、四十三本の矢で十二人を射殺し、十一人を傷付けたと云ふのだから、敵も味方も、その手並に感心して見てゐる、すると明秀は履を捨て、橋桁を渡り、今度は長刀を水車に振り廻はして敵勢の只眞中に

躍り込んだ。

『それ手強いぞ、射て仆せっ』と平氏の名々が射掛る矢を或は跳び越え、或は長刀で拂ひ、近付きざまに早や五人の敵兵を薙ぎ仆し、六人目の冑を斬つて折れたので、次は太刀を抜いて手當り次第に八人を斬り殺し、九人目に柄元から折れて刃は川水の中へ飛び込んだ、で最後に小刀を抜き放つて猛獣のやふに、立ち騒ぐ敵勢の中に斬り込んで暴廻つてゐると、味方の一來法師と云ふ僧が應援に來て吳れたので、後を譲つて平等院に返り、芝の上に鎧胄を脱ぎ捨て、体を調べると十數ケ所の傷が有つた

云ふ、明秀はそれに應急の手當をすると法衣に着替えて折弓を杖に、足駄を履いて、

『南無阿彌陀佛〳〵』と、唱えながら、悠々と奈良の方へ差して行つたが、その后の消息は分らない。

一方平家方で見ると、ざうしても此の河を渡らないと徒に味方をいためるばかりで捗らないのだが、何分水が深い上に急流なものだから、躊躇つてゐたのです。

時に足利又太郎と申す十七歳の若武者の發案で、總勢を一列に永く岸に並べ、手をつないで流されぬやふにして、つまり馬垣を作つて一時に水に乘り入つて渡つたの

です。

其處で敵味方亂れ合つての大激戰が始つたが、無勢に大勢到底支へ切れぬと分ると賴政は早くも以仁親王を奈良へ落し申し、自分は後に踏み留つて戰つたが遂に深手に耐え兼ね、平等院前の芝原の上に自害をして相果てました。

埋木の花咲くこともなかりしに
身のなる果ぞ哀れなりける

と云ふのが、賴政の辭世の句で、時は安德天皇の治承四年、紀元千八百四十年に當ります。

又一度此處を遁れ給ふた親王は、御運拙なく間もなく討手の矢に、悲慘な御最後を遂げ給ひました。（完）

【13】富士川

——靜岡縣——

名所

富士川は甲斐に源を發して駿河に入り、富士山の麓西をめぐつて駿河灣に注ぐ東海道第一の急流だが平維盛が賴朝の軍を喰ひ止めやふとして、反而水鳥の羽音に驚いて逃げて歸つたと云ふ、不

名誉を遺したのは、富士初岩松村で本山山下のあたりです。

史蹟

——平維盛——

伊豆に頼朝が擧兵をしたと云ふので、當時福原（今の兵庫）の別莊に移つて居た清盛は孫にあたる少將維盛に頼朝討伐の役を命じました。

其處で維盛は上總守忠清や、齋藤別當實盛等を召し具して東へ進軍しましたが、維盛は父重盛には似ず優弱一方の殿原で、戰爭の術も知らねば又武事にも餘り通じてゐませぬでしたので、清盛は忠清に司令官の役を申し付

けて有りました。

が此の忠清が又少し臆病者でしたので、大事に大事をとり、餘り深く攻めて行かずに、富士川の急流を楯にして源氏の軍を迎え討つやふに大將維盛に勸めました。

「何を申しましても、味方は僅に七萬騎ばかしですが、敵は何十萬とも計られませぬ、これは富士川の難所に據つて防ぐより外に至し方は御座りますまい。」

維盛は敵勢何十萬とも計られぬと聞いて慄え上つて了つた。そして、

「ではそういたそう。」と答へて置いて、更に頼みに思ふ

齋藤實盛を召し、

『これ實盛、そなたは弓が上手だから、源氏の軍等怖れなくてもいゝだらふねー。』と仰有る。

『是は又變つたお尋ねで御座ります。』と實盛は笑つて、

『私位弓を引くものは日本中何人でも御座りませふ、それに一体關東の武士は心掛が違ひます、親が討死をすれば子はそれを踏み越えて戰ふと云ふ、全く猪のやふな戰ひ振ですが、西國の武士は一体が風流の道にこそ通じてゐましても、いざ戰爭となると一向に役立ちませぬ腰拔共ばかりですから、此度の合戰は眞に氣遣はしいものだ

と存じてゐます。』と答へました。

それを聽くと維盛は一層臆病風に吹かれて、戰はぬ前から、顏の色を變へてゐます。

これは賴政が擧兵をいたしたのと同じ治承四年の十月で、その二十三日の夜、平家方では斥候を出して敵勢を調べさせますと、

『源軍は、山の谷々、河の岸、さては海に迄滿ちてゐますので、その數何十萬と數へ切れませぬ。』と云ふ報告をして歸つた。

が實はこの時には未だ源氏の軍勢は此のあたりへは來て

ゐなかつたのだが、土民は戰爭を恐れて山に遁れ、海に逃げて焚火をしながら、事のおさまるのを待つてゐたのです、この百姓共の群を敵勢だと見誤つたのですから、斥候もまことに大將に似て臆病だつたものと思はれます

兎に角、それや此れやで、びく〳〵しながら川岸に露營をむすびましたが、夜半物に驚いて飛び立つた沼の水鳥の羽音が、恰度大風か、雷のやふに聞えて來たので、平軍の夢は破られ、

「それ敵が押し寄せて來た。」と誰かが叫べば、

「夜襲だ、夜襲だ」とそれからそれへと傳はりました。

事なくてさへ恐れ切つて居た時ですから、此の聲に一同はすはこばかり跳ね起き、鎧着る間もなく、馬に鞍置く間もなく、手近に有合ふ馬に飛び乘つて、大將の命令も物の數かは、命からく〳〵逃げ出した。

幾ら走つても走つても同じ處ばかり、ぐる〳〵廻つてゐる人が有つた。氣が付いてみると馬を繋いだ綱を解くのを忘れて、無闇に木の株の周圍を馳せ廻つてゐたと知れた……と云ふ話も有つた程だから、隨分思ひ切つて狼狽したものと思はれます。

その翌る日、即ち二十四日に賴朝は二十萬騎を率ひて

堂々と富士川に來ましたが、幾ら鬨の聲を擧げても、何の應えもないので、不審に思つて調べさせると、刀や鎧が亂れて殘つてゐるばかりで、人影一つ見えなかつたので、全軍は張り合が拔け、只その迂活さを笑ふばかりでした。

茲に賴朝は馬を下り胄を脫いて、水に口をそゝぎ、都の方へ向つて王城を拜し、更に八幡に武運長久を祈つたと申します。

富士川のせゝの岩越す波よりも
早くも落つる伊勢平氏かな

（完）

【14】粟津ケ原

——滋賀縣——

名所

粟津ケ原は琵琶湖の南端、大津市の南に有る古松立ち並んだ風光の良い所で有る、このあたりは東海道の要所なので古戰場に富み、初め平家が源氏の軍を防いで破られた勢田も有り、粟津では木曾義仲が討死をしたので有名だ。又石山寺、唐橋等共に古めかしく床しい。石山寺には紫式部が源氏物語を書

いた所と謂ふ源氏の間がある。又大津
市の義仲寺に義仲の墓が有り、粟津ケ
原に兼平の墓が昔を語つてゐる。

史蹟

――木曾義仲――

源氏の魁となつて旗擧をした木曾義仲は、勢田に平氏を破つて都に入り、平家を西國へ追ひやつて了ひ、京都の守護役は義仲の手に歸したのだが、義仲は元來木曾山中で育つて野武士風の粗暴な人だつたので、横暴な行が多く、後白河法皇は是を惡み義仲討伐のことを賴朝に命じ給ふた。

其處で賴朝は弟範賴、義經の二人を大將として京都へ攻めさせる事にいたしました、それを義仲は宇治、勢田に防ぎましたが、その効なく戰敗れて京都近く迫まれたので、遂に僅の殘兵を連れて一先づ北國へと志し、漸く來掛りましたのが粟津の山蔭、其處でゆくりなく義仲の片腕と謂はれてゐる勇將今井の兼平に出遭ひました兼平は勢田で範賴と戰つて敗れ、京都へ入らふとしたが都へは早や義經が進入したと聞き、此の上は義仲は北陸へ落ちるに違ないと思つた所から、その途中で有る、此の粟津へ來て待つてゐたのでした。

『私も』と義仲は馬を並べた兼平を顧て申します。

『私も京都で討死をしやうと思つたが、お前のなり行も知りたく、若し無事でゐるなら今一度逢つて死に度いと思つたので、此處迄來たのだが……。』と流石の義仲もつい涙を見せた。

『私こても勢田の合戰に討死をして惜しくない命ですが君の御最後の程を御見屆いたし度いばかりに、をめ〳〵敵に後を見せました。』と兼平も鼻を詰らす。

『ですが我が君。』と聽て兼平は顏を擧げる、

『此の邊には外に落武者も少しは居る事と思ひますから

是等を集めて最後をかざる花々しい合戰をしては如何でせふか。』

『うむ。』義仲は思はず鞍を叩いて、

『それは望む所だ、兼平旗を擧げて見よ。』

と活氣付いた。

で兼平が卷いてゐた馬印を高く飜すと、彼方の谷、此方の山から、或は五騎、或は十騎と馳せ集つた落武者が忽ち三百、それに兼平が連れてゐた者を加へて五百騎の軍勢となつた。

『これだけあれば、今一合戰出來るわい。』

義仲は喜び一同と共に討死を約した時、範頼の軍が後を追つて此處へ來たので忽ち火の出るやふな激しい接戰が始つた。

だが敵は二千、或は三千と云ふ素晴らしい大軍が二手も三手も居るのだから、ごんな事が有つても勝ち戰では無い、此處で五十騎、彼方の松原で百騎と段々討たれて粟津の松原から打出の濱に來る迄には、僅に主從五騎となり、更に流れ矢にあたつたりする者が出來て最後に義仲、兼平の二騎のみになつて了ひました。

「我が君。愈々最期の時が參りました。名も無い雜兵の

矢に仆れましては、末代迄の不覺で御座りますから、それ、あの……。」

と兼平は少しく、小高い松の丘を指し、

「あれにて立派に御生害遊ばせ、私はその間邪魔者を防いで居りませふ。」

と勸める、

「兼平さらばそなたの言葉に從はふ、今生での別れだ」

そう云つて義仲は馬を疾めて丘に行かふとしたが、不案內の爲つい泥田の中に馳せ入つたものだから、馬の胴のあたり迄踏み込んで、ごうしても動かなくなつた。

それと見た敵兵の石田爲久と云ふ人が時を移さずひうと切つて放つた矢は、狙あやまたず義仲の額のあたりを射たので、流石の猛將も、そのまゝ前に俯伏して了つた「それ打捕れ。」こばかり爲久の郎黨二人走り寄つて義仲の首を斬りました。

主君のあえない最期を知つた兼平は殘る矢八本に全身の恨を籠め、見事八人を射落すと、

『義仲の家來今井兼平の最期の樣を見よ。』

こ大音聲、陣刀の切尖口にくはえると見る間に、馬の脊から眞逆樣に落て、天晴勇ましい最期を遂げました。

時に義仲は三十七歳、兼平は三十三歳、安德天皇の壽永三年正月廿一日、義仲が偉風堂々都に入つてから僅に半年の後のことで、此の年は紀元千八百四十四年にあたります。(完)

【15】一の谷

名所

——兵庫縣——

一の谷は攝津と播磨の國境山脈中に有つて、附近に二の谷、三の谷が有り、山岳起伏して自然の砦になつて居る、

前に海をひかえた要害の地だから、京都を追はれた平氏の一門は此處に陣を構えたのだ。

此の一の谷を西門に、そして、今の神戸市の東部生田を東門として固め、その間の海岸線一帯を城廓としてゐたので、治承三年二月範頼は東門生田を、そして義經は西門一の谷を衝たのです。

海岸須磨の浦は遙に淡路を望んで、風光絶佳、その上哀れな平家の末路を語りたげに、昔ながらの老松が綠の袖をつらねてゐるので、一入床しく、後の

世の歌人が、此處で詠んだ歌の數も隨分と多い。

一の谷の西五町程の所に今語らふとする平敦盛の墓が有る。

史蹟

——平敦盛——

萬々大丈夫と安心してゐた一の谷の險所を、思ひ掛なくも義經の思ひ切つた逆落しで、瞬く間に破られ、火と矢に追ひ立てられたものだから、平氏の一門は驚き狼狽て、須磨の浦から船に乘つて逃げ出した。

義經の家來熊谷次郎直實は、その子小次郎と共に此の

戰に素晴らしい手柄を立てたが、船に乘り遲れた名有る大將でも有れば、討ち取り度いものだと思つて、汀の方へ馬を進め、良き敵あれやと見廻はしてゐました。

時に小松原を馳せて出た一騎、ざんぶと海に乘り入つて、沖合遙の船を目掛て乘り着かふとするのが目についた。

その鎧こ云ひ、馬と云ひ、冑こ云ひ太刀といひ、何れも立派なものばかりで、何れ名ある平家の公達であらふこ察せられたので、熊谷次郎直實は、汀に追つて行きながら、軍扇さつこ押し開いて、

「敵に背を見せ給ふは卑怯で御座らふ、返し給へ、返し給へ。」こ招きました。

その武士、直實の聲を聞くこ、手綱をぐいこ引きしぼり、向きを返して岸に上つて來た。

「いで組み申さう。」待つてゐた直實はそう云ふなり、大手を擴げてむんずこ組み付き、渚にごつこ落ち、揉みつ揉れつ、暫時力を爭つてゐたが、武力にすぐれた關東武士は間もなく、此の武士にしては優し過ぎる若人を組み敷いた。

しつかこ膝で抑へて直實は、さて首を掻き斬らふこ小

柄逆手に、左手を伸ばして敵将の兜をおしのけた、が見れば年漸く十七ばかし、色白く眉秀でた容顔は、いづれ名有る公達に相違有るまい。

「今はの際にお名乗り召されい、誰様に渡らせられるぞ？」と直實は優しく訊いてみた。

「私は兎も角、汝は誰ぞ」とその若武者は下から聲掛ける。

「私は熊谷次郎直實と申す者。」

「さらば私の名を聽かず共首取つて參れ、無駄にはなるまい、恩賞に預るであらふ。」と、云ふ、

だが如何に敵とは云へ、此んな優しい公達を斬るのは不愍だ、それに年は恰度息子の小次郎と同じ位、今朝小次郎が一寸した怪我をした時でさへ、並大抵の心配でなかつたに、此の方が首取られたことを親達が知つたならそもどんなに悲嘆なさるか知れない……と思ひ遣れば下に組み敷きながらも斬る氣にはなれぬ。

「よいお覺悟で御座ゐます。だがあなたを一人斬つたからつて、お助けしたからつて、勝つ戰が勝つでもなく、負ける戰が敗戰に變るでも御座ゐませぬから、お逃がし申しませふ」と云つて膝をゆるめたが、ふと見ると彼方の

松原に、凡そ五十騎ばかしの味方の武士が、此方の様を見物してゐるので、はつと驚き、

『あれ御覧遊ばせ、今私が御見のがし申しても此の邊にはあんなに味方の勢が滿ちく〳〵てゐます、いづれ遁れぬ御命ですから、不愍ながら生命を申し受けますからお覺悟遊ばせ。』

と云つて立ち上り、太刀を取り直す、

若武者は砂に座り、手を合はせて眼を閉ぢ、首を差し延べて、

『早う斬れ、早う斬れ』とせき立てる、

直實は悲しい心に涙をのみ、心にも無い刃を振り上げて、無慘に、

『えいツー。』と斬り下げた。

そして泣く〳〵首を包まふと直垂を脱きますと、錦の袋に入つた笛が轉び落ちました。

後に聞けば、この公達は平經盛の末子、太夫敦盛卿で風雅の心厚く笛は特に上手であつたが、討死の時持つてゐたのは以前に鳥羽法皇から經盛に下されたものを、讓り受けてゐたのだと分りました。

敦盛は平氏一門の滅亡を目のあたりにして、尚ほ陣中

で毎夜此笛を吹いてゐたので、源氏の武士の中にも、それを聞いたと云ふ人が有りましたが、優にやさしい語り草ではありませぬか。

[16] 屋島

名所

香川縣々廳の所在地高松市の東一里半の所に、南から北へ内海へ深く体をのめり出して、俯伏になつたやふな半島が屋島である、昔は島であつたのであ

——香川縣——

らふが、今では小河程の水路が僅に南端をめぐつてゐるばかりで、殆ど陸續である。

屋島の東麓壇の浦から東牟禮村と云ふあたりへかけての一帶が源平の古戰場で、那須與一宗高の駒立石や、佐藤嗣信の墓、さては内裏址等見るべきものが點在してゐる。

又屋島山上の屋島寺には、源平合戰の遺物が數多く秘藏されて有る。

史蹟

——那須與一——

壽永二年に木曾義仲に追はれた平氏は一時九州に落ちたが、その年源氏では義仲討伐や何や彼と暇を潰してゐる間に、平氏は西國武士を集めて、徐々と東へ取つて返して來た、そして宗盛は此の屋島に行宮を造つて安德天皇を迎え奉り、後に一の谷へ迄押し返して行つたが、翌年義經、範頼に敗られ、取るものも取り敢えず軍船に乘つて此の屋島へ返つて來たのです。

一方源氏の軍は一の谷で勝利を占めると、飽く迄平氏を追つて全滅させるつもりで、各大將揃つて船出したのですが、稀な大暴風に見舞はれて、兵船は散り〳〵にな

り、義經は僅の手勢と共に阿波の國、尼子の浦と云ふ所に吹き着けられた。義經は其處に上陸し、それから國境を踏み越えて讃岐に入り、北上して屋島に向つたが、その途々少し宛兵を増して、ごうにか百餘騎だけ調つた。だけど、此んな僅な人數では迚も堂々と戰つては勝ち目がないので、義經一流の燒撃の計を採つた。

東風の激しいのに乘じて附近の民家に火を放つと、見る〳〵平家の陣に飛火して猛火に包まれて了ひました。で宗盛は主上、女院、それから清盛の妻で有つた二位の尼を船に乘せまひらせて沖に遁れさせ、防戰にかゝつた

此處で兩軍の名にし負ふ勇士等互に鎬を削つて奮戰したが、猛火に本城を奪はれてゐるので、思はしく戰へず、遂に平家方は皆船に乘つて沖に遁れ、暫時は陸と海とで睨み合つて矢をまぢえてゐました。

その時沖から一艘の小舟が渚近くへ漕ぎ寄せて來ました。船には一人の女官が立つてゐて扇子で招いてゐる、舳には高く日の丸を描いた紅の軍扇を開いて立てゝ有るのだとは誰の限にも分つた。

「これを射よ。」と云ふのを義經は近くに附いてゐた重忠に、

「陣中に誰か弓の名手は有るか。」と尋ねる、

「那須の太郎資高の子與一宗高の外には有りますまい。」

「ではその宗高を召せ」と謂ふことになつた。

宗高は二十歳ばかりの若武士だが、弓にかけては滅多に負をこらぬ腕前が有る、けれど今日の仰には餘り心が進まなかつた。と云ふのは美事に射た所で敵の大將を討ち取つた程の手柄にはならず、若しも射損でもしやふものなら全く味方の恥で腹を斬る位の覺悟はしてゐなくてはならぬのだからであるけれど、主命に逆くことも出來ず、

『畏りました。』と云つてずか〳〵と渚に馬を進めたが、

少し遠う過ぎると思つたから、海の中へ乗り入れて弓を構へた。

敵も味方も鳴を鎭めて見物してゐる。

宗高はやをら矢をつがへたが、波風に搖られてゐる船の的は少しの間も定まらないので射る事が出來ない、宗高は必死である。この上は神佛の加護をと思つて眼を閉ぢ、

『那須の大明神、願はくばあの的射させ給へ。』と祈願を込め、眼を開くと不思議や扇の要のあたりが定まつて見えた。

『有難し。』と宗高は矢を放つた。

矢は要にあたつたから、扇はさつと空中に舞ひ上り、ひら〳〵と飜つて海に落たので、敵は舷を叩き、味方は鞍を打つてやんやと賞め、暫時は鳴り止まなかつたのでした。

それから更に船を漕ぎ寄せて岸に上つた武士も有りましたが、皆源氏の强者に殺されたので、殘る平氏は第二の砦屋島を後に、西海へ遁れねばなりませぬでした。

（完）

【17】壇の浦

名所

本州の西端長門の國、下の關市の東海岸に壇の浦が有る。

平家滅亡の舊蹟で、下の關市に安德天皇を祀る赤間宮が在り、その東に隣した老松に圍まれた塚が安德帝の御陵でその背後に壇の浦に沈んだ平家一門、資盛、敎經、知盛、二位尼その他の墓が有つて、傷い平氏の末路を偲ばせる。

——山口縣——

史蹟

平氏は先年九州で大分味方を得てゐるからそれを賴つて行かふと思つて、屋島を出ると瀨戸內海を西へ、九州へと漕寄せたのだが、その前に既に範賴は九州に入つて此地一帶を味方に着けて了つてゐたので、平家方の豫算はすつかり狂つた、そして彼方の島、此方の島こさまよつて見たが、何れも今は敵になつてゐて上陸する事も出來ないので、壇の浦に船を着けてゐました。

其處へ義經は兵船を仕立て、追つて來たので茲に大海戰が初まる。

——平氏滅亡——

此の邊は申す迄もなく瀬戸内海の瀬戸、つまり入口なので水勢が非常に早い、平軍はそれを利用して戰を開き盛に攻め立てたので、水利に不案内な源氏方は、一時は隨分危まれる程の窮狀に墜つた、それにも一つ平氏の軍船は天皇の御座船を取り巻いてゐたのだが。

若し御座船に矢が飛ぶやふなことが有つては懼れ多いと云ふので、義經は一切弓を用ひさせず、只船を近付けて斬り込むばかりだつたので、大變戰ひ難くも有つたのだ。

だがごうにか防ぎ保つてゐる中に潮の流れが變つて此

度は源軍に有利になつて來た。

それに加へて、平氏の味方で有つた田口茂良と云ふ大將が裏切つて源氏に通じ、御座船には實は主上は在さぬと云ふこと迄も知らせて來たので、盛に弓矢を用ひ、ひるむ所を斬つて入つたので、瞬く間に平軍は亂れて敗北の色が鮮になつて來た。

勝敗の數も決したと知つた宗盛は、小船に乘つて主上ののます兵船へ參りますと、女官共は待ち兼ねて、「戰爭の樣子は如何ですか。」と心配そうに訊き、知盛から、

「もう間もなく、此の船にも關東武士が參りませふ。」と云はれると正体もなく泣き悲しんで騒ぎ立つた。

「そんなに悲しんで見苦しい様を源氏に見せて呉れるな。」そうたしなめて、知盛は軈て主上の御間に入つて行き、二位の尼に、

「愈々御覺悟遊ばす時が來ました。」と申し上げた。

「左様か。」二位の尼はかねての覺悟だから騒がず、靜に立つて身ごしらへをし、船中の見苦しそうなものを皆海に投げさせ、奇麗に片付けて扱て漸く八歳の安徳天皇を抱き奉り舷に立たれました。

右左の船に敵味方斬り合ひ、組み合ひ激しく戰つてゐる中に、源氏の船が段々近付いて來る、主上は審しく、

「尼よ、何處へ行くぞ。」と尋ね給ふ。

「君、此の海の底に美しい都が御座ゐます。其處には此やふな戰爭もない、眞に良い所で御座ゐますから、今お伴ひ申し上げるので御座ゐます。」と申し上げ、

今ぞ知るみもすそ川の流には
浪の下にも都ありとは

の辭世を遺し、ざんぶと海に沈み給ふた。

續いて帝の御母女院も水に入り給ふたが、間もなく義

經に救はれました。

教盛、經盛、資盛等自ら海に身を投げた者數知れず、遂に平氏は一門悉く亡んで了ひましたが、これは壽永四年の三月で、清盛が太政大臣になつた時から二十年足らずの后です。又此の年は紀元千八百四十五年に當ります

（完）

【18】鎌倉

名所

鎌倉は治承の昔、源頼朝が幕府を開

——神奈川縣——

いてから後約二百年、北條足利兩氏繁榮に至る間、政事の發せられた所で、附近に數多く有る名所舊蹟は、多く此の時代のものです。

建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨明寺、所謂鎌倉五山は大抵北條氏の建てたもので壯大だ。又鶴ケ岡八幡宮は、源家の守護神だが、此處で實朝が刺殺された。

由井ケ濱は江の島を望んで風光良く、新田義貞が劍を沈めて海底を涉つたと云ふ稻村ケ崎も程近くに見える。

史蹟

——源頼朝——

頼朝の話こなると數限りなくあるが、元來此の人は一代の英雄では有つたけれご、ものに疑ひ深い性質が缺點で有つて、從弟の義仲を殺し、叔父の行家、さても弟の範頼、義經を殺し、それで一身の安全を謀らふとしたのが、それが反而源氏早滅の因となつて、間もなく北條氏に幕府を奪はれるやふなことになつたのです。

範頼は用意周到な悧巧な性だつたので、義仲や義經が兄頼朝の猜疑を蒙つて悲慘な最期を遂げてからは一層、言葉や行に氣を附けて、兄の心に從ふやふに力めてゐた

のでした。

處があの富士の巻狩で、工藤祐經が曾我十郎、五郎兄弟の怨の刃にかゝつた時、一時は大變な騒ぎで、鎌倉あたりでは、將軍頼朝も殺されたご此の風評が立ちました。で頼朝の妻政子はその事を大變に心配してゐたので留守居役の範頼は慰めて、

「もしもの事が有りましても私が居ます以上は、決して御心配なさいますな。」と云つてなだめたのですが、後に此のことを聞いた頼朝は例の猜疑心から、弟の言葉を屈げて受けて、

「では範頼は、私に代つて天下を取らふ下心が有るのだ。」と獨りで決めて了ひ、今迄とは變つて範頼を憎み始めた。

此うなると範頼も兄の氣性を知つてゐるから、又義經と同じ憂き目に逢ひはすまいかと心配になる、其處で私かに身のまはりを固めるやふになりました。

處が頼朝の腹臣梶原景時と、親類の北條時政とはかねて、範頼を邪魔者に思つてゐたのだが、今こそよい機だと思つたので二人が二人共揃つて、

「範頼殿は謀叛のお心が有るのか、此頃しきりに兵を集

めてゐます。」

と云つて頼朝の心に油を注いだので、益々怒りが燃え上る。

機の悪い時と云ふものは至方がないもので、こんな悪いことの重つた上、愈々最後に言ひ譯のならぬ事が出來上つた。

それは範頼の家來當麻太郎と云ふのが、主人の身を思ふ一念から、或る夜頼朝の寢所の床下にもぐり込み、頼朝の心を聞きたゝそうこしてゐたのを、運悪く宿直の武士に見付けられて縛られた。

この事は範頼は全く知らなかつたのだが、頼朝は、

「私を殺させる爲に忍ばせたのだ。」と考へたものだから

もうごう云つても許さずに、遂々殘るたつた一人の弟を

伊豆の修善寺に押し籠め、それでも安心出來なかつたのか、それ共景時等の勸めでか、一年ばかりの後に兵を差し向けて無理に自殺させて了ひました。

殘るは奸智に長けた北條原、一身の出世の爲には何時でも主人を持ち替えそうな腹黒い家來共ばかりで、頼朝は自ら孤立して了つたのです。

これではその家が僅に三代保ち兼ねて滅びたのも無理は有りませぬ。（完）

[19] 笠置山

―京都府―

名所

京都府山城國の南端、大和との境に、笠置山が有る、關西本線笠置驛の南近くで、木津川に迫られて斷崖絕壁、高く聳えて要害の地である。

山上に元弘の亂に後醍醐天皇が難を避けて、幸し給ふた行宮の址が有ります。

史蹟

——後醍醐天皇——

北條高時が執權になりましてからは、日夜遊興に耽るばかりでしたので、一層政事が亂れて人民の信用を失つて了つた。

豫て國に天皇が有りながら、臣下が政治をするのは間違つてゐると快からず思召してゐた後醍醐天皇は、此れを機に幕府を倒し、政事を皇室にかへそうとの計畫を遊ばし、皇子護良親王と謀つて、私かに延曆寺、興福寺等の僧兵に討幕の命を下されました。

所が未だ擧兵をいたさぬ中に此の事が洩れ、高時は大

いに怒つて大軍を率ひ、京都へ向つて押し寄せたので、天皇は夜に乘じて都を遁れ笠置山に行幸遊ばし、護良親王は大和に隱れ給ふ、時は元弘元年八月。

天下の心は既に北條氏を離れてゐるので、忠臣義臣が所々に起らふとする樣がほのみえたので高時は、それ等勤王の士が笠置を護らぬ間に攻めねばと思つたので、糟谷三郎宗秋、高橋又四郎通宣等に急いで笠置を攻めさせた。

九月になつて松の綠に露繁くなつた頃此等賊軍は笠置を圍み、茲に戰は開かれたが、官軍はよく戰つて再三敵

を走らせたゝが何を云つても味方は無勢、何萬こも知れぬ大軍に取り圍まれた上、陶山義高こ云ふ敵の將が、險しい崖を登り、風雨に乘じて火を放つたので、城中忽ち火炎に包まれ官軍の狼狽一方ならぬ、時に乘じて賊軍は一齊に攻め登つたので遂に笠置は陷て了ひました。

その時中納言藤原藤房こ弟の季房こは主上を輔けて行宮を遁れられたが、天皇は僅に草履を素足に召し給ふた、ばかりで、此の雨風の中に雨具も無く、藤房兄弟の手に縋つて嶮しい難路を辿り給ふ。

その中に夜もほの〴〵こ明けますと、敵の眼にかゝる

心配が有りますので、岩蔭や谷間に身を忍ばせ、夜に入るのを待つて又とぼ〳〵こ歩ませられる、

雨に打たれ、風に曝され、三日三夜召し上りものもなく、疲れ果て給ふてある松蔭に、岩を枕こして伏し給ひました。

まごらかならぬお夢のまに〳〵、ふこ降り注ぐ一滴、又雨かやと思召して眼を開き給へば、月の無い空に無數の星がまばたきしてゐる、さては松の葉の露で有つたのか、

さして行く笠置の山を出でしより

天が下にはかくれがもなし、

と宣ひ給ふ、藤房はせき來る涙を袖にて拂ひ、

いかにせぬ頼む蔭こて立寄れば、
なほ袖ぬらす松の下露、

と返し奉りました。

一天萬乘の君に渡らせられて、此くの如き辛苦を遊ばしたのは、古今に全く例の無い事で、眞に懼れ多い限りで御座ゐます。

だがその上に更に艱難が加つた、間もなく此のあたりで賊軍に見出され、主上は宇治平等院へ、他の公卿達は

又捕へられて引かれました。

其處で高時は擅に後伏見天皇の皇子、量仁親王を天皇といたしました。光嚴院と申すのが此の方ですが、後醍醐帝は高時の言葉を拒み、三種の神器をお渡しにならなかつたので高時は非道にも、天皇を隱岐の島へ遷し奉つた。時は元弘二年、紀元千九百九十二年です。(完)

【20】 般若寺

名所

大和國添上郡木津村の奈良阪と呼ぶ丘 ―― 奈良縣 ――

の南に般若寺がある。
此の寺は元孝徳天皇の御宇に建造され
たものだが、後世再三火災に罹つた。
今の寺院は寛文年間に再建したもので
舊体そのまゝの構造だと云ふ。

――護良親王――

史蹟

護良親王は叡山で賊兵と戰つて、主上の御趾を追ひ笠置に入らふとしましたが、その時早笠置は陷つて主上は賊軍の手に守られてゐると聞きましたので、暫時事の成行を見やふと此の般若寺に身を忍ばせてゐ給ふたのです

所が此の事をどうして知つたのか、法眼と云ふ大將、五百騎を從えて、此の寺を不意に襲ひました。
その時親王は只お獨りで有つたので、無慘〳〵賤しい者の手にかゝるよりはと思召し、既に自害の覺悟をなさつたが、主上の御身を思へば今の生命は輕からずと思ひ返し、遁れられるだけは遁れられるだけはと決心遊ばして本堂へ走つて入られ、よい隱れ場所はないかとあたりを求め給ふた。
たま〳〵置き並べられて有つた經櫃、三つ有る中で蓋が開いてゐて半分程經文が充てゐる中へ忍び、上から經本を引き被いで息をこらせられた。

時を移さずごや〳〵と押し入つて來た兵卒共は、天井はもとより椽の下迄、殘る隅なく探した末、やがて、

「この櫃が怪しい。」と云つて近付いて來た。

「も早や是れ迄。」と親王は覺悟の刄を逆手に握り、賊兵の手が我が櫃にかゝるご同時に、自ら刺して死のうと身構え給ふ。

だが天の助けか、蓋の開いた方のは返つて怪しまず、他の二つを開いて見たまゝ、

「此の樣子では外に隱れてゐるに相違ない、遠くへ行かない間にそれ追へ。」と云つて皆ごや〳〵と出て行つた。

(128)

親王はほつと心を安んじ給ふたが、萬一を心掛けてその經櫃を脫け出し、他の先に兵の調べた櫃の中に忍び給ふたが、案にたがはず再度兵士達は、

「ごうも不思議だ、何處に居給ふのか知らん。」

と云つて入つて來たが、先にあらためなかつた櫃をぐさりご槍で刺し通した、けれご何の手ごたえもないので、遂々諦めて此の寺を去つて行つたのです。

眞に危機一髮ごは此の事で、親王はその機智に由つて危ない所を遁れ、それから一時紀伊の國へ落させ給ふたが、村上義光等勤王の軍を得て、大いに勢ふるひ、再度

(129)

の旗擧をなさらふ爲に、吉野の山へ楯籠り給ふた。

（完）

【21】吉野山

名所

——奈良縣——

大和の國の中部に吉野山が有る、昔から櫻の名所として名高く、更に護良親王此處に戰ひ、楠正成、正行も又此處に物語を遺したので、歷史の上にも有名な所です。

關西和歌山線の六田と云ふ驛から東北

に當る、先づ二十町程坂を行くと長峰の櫻が有り、次に後醍醐天皇を祀つた吉野宮が在る、更に進んで義光の墓を吊ひ、一目千本櫻の名所を過ぎると、二王堂、藏王堂が有る。

それから北に中の千本の櫻林が有り、「かへらじとかねて思へば」の歌で名高い如意輪堂が遺つてゐる。

護良親王は、藏王堂を陣營と定め、手入をして是を吉野城と申してゐました。

——村上義光——

史蹟

元弘三年正月十七日、高時の屬臣二階堂出羽守貞藤は六萬餘騎を率ひて吉野を攻めました。

皇軍は護良親王自ら司令し給ふて、吉野城に籠もり、天然の嶮難に據つて大奮戰いたし、大いに敵をなやましましたが、何を申しても兵が少ないので、背后の砦には只旗を押し立てゝ有るばかりで、兵は一人も居ず、皆正面の敵にかゝつてゐたのです。脊后は全く屏風を立てた樣な斷崖で、その上滑かな苔が一面に附いてゐるので、まさかに登つては來られまいと思つてゐたからでした。所が此のあたりの地理に詳しい岩菊丸と云ふ者が手引

をして、賊軍の一部を此の搦手へ導き、一時にどつと鬨の聲を擧げて火蓋を切つたので、味方は前后に敵を受け大變な苦戰に陷りました。

その機に乘じて敵は城中城外、手あたり次第に火をかけましたので、一面火の海となり、遁れ路を失つて火に跳び込み自殺した者も數知れず、或は斬られ、射られ、忽屍の山を築きました。

岩菊丸の一隊は勢に乘じて藏王堂に迫つて來る。

「早や是れ迄、最期を淸くせよ。」と仰有つて親王は重だつた大將二十騎と共に討つて出て、群がる敵の中で斬り

むすぶ、

その刃先の鋭さ、とても受け切れずに敵勢はさつと引く、

「此の間に最後の訣別をしやふ。」

親王初め生き残つためん〳〵は、傷付いたまゝ、血の流れるにまかせて藏王堂の庭に歸り、親しく盃を交はして互に別を告げてゐる。

その時早や火は藏王堂にも燃え移つたが、死を覺悟の諸勇士等は、そんなものに頓着なく大盃を傾けて悲壯な詩を吟じ、劍を振つて舞ふ者も有りました。

時に村上義光、鎧に衝立つた矢十六本をそのまゝに、折れた太刀を杖につき、皇子の御前によろめき進み、

「さらば宮樣、愈々お別れの時が參りました、今の中に此處をお落ち下さいますやふに。」

と申し上げたが宮は、

「諸共に死ぬ迄だ。」と仰有つて御承知なさらない、

「いえ〳〵、宮樣は御大事な御体です、君が若し討死遊ばしては、誰が賊軍を討ちまゐらせふか。」と切にお願ひ申したので、宮も漸く、

「さらば、次は冥途で逢はふぞ。」と涙と共に忠臣共に別

れ、私かに裏木戸から遁れ給ひました。

その後影を、見えずなる迄お見送り申し上げ、手を合せて御無事を祈り、

扨て美事腹を切らふございたす所へその一子義隆が馳せ参じ、

「お父上私も共に死出のお供を仕ります。」

と云ひ様、諸肌押しくつろげやうとする、

「やよ待て義隆。」と父はその手を抑え、

「父はこても助からぬ此の深手、お前には未だ仕事が有る、早く宮様の御後を追つてお守り申せ。」と訓しました

其處で父子は一生の別れをいたしたが、義隆の姿が木の間に消えると義光は櫓に登り、取り巻く敵を見下して

「大塔宮護良親王、今逆臣の手にかゝるを無念に思ひ、自害して相果る。」と呼ばはり、鎧を脱いで投げ捨て、胸押し開くよと見る間に小刀ぶつつと左脇腹に突き立て、右へ一文字に掻き切り、腸を摑み出して投げつける、そして太刀を口にくはえたまゝ俯伏し、咽を貫いて悲壯無比な最期を遂げました。

「それ宮様が御自害なされた。」と敵は身代りとは知らず に圍を解いて城中へ集まる、その暇に護良親王は細道傳

ひに山を下り、無事に高野山へ落ち給ひました。

又一方義隆はその途中親王を追はふとする岩菊丸の一隊を一人で防ぎ、刀折れ、矢盡きてかたへの笹の中に入り、是れ又美事に腹を切つて父の後を追ひました。

歌書よりも軍書に悲し吉野山。

（完）

【22】金剛山

名所

河内の國の東南端、大和との境に金剛山が有る。

海拔四千八十尺の高山で、楠正成が勤王の旗擧をしたので名高い。

此の高山の西中腹に千早城址が有る、山嶮しくて谷深く、天然の砦を利用したもので、慘々賊軍はなやまされた。

―大阪府―

史蹟

後醍醐天皇が笠置山に幸し給ふて、敵にそなへをなされた時に、河内の人楠正成は一味の者を從へ、赤坂城を築いて勤王の旗擧をしましたが、忽ち高時の軍に圍まれ

―楠正成―

糧食が盡たので城をすて、金剛山に楯籠りました。

そして元氣を恢復し精鋭の武士を加へて、一擧に赤坂城を襲撃して、是を取り返しましたが、此の城では大軍を支へる事が出來ないので、金剛山の嶮難の地に千早城を築き、此の城に據つて勤王の聲を擧げますと、心有る武家の味方して來る者も有つて、侮り難い勢力になりました。

それと同じ時分に護良親王は吉野に旗擧をいたしましたので、北條軍では大いに驚いて大軍を發し、吉野と千早城とを殆ど同時に攻めかけました。

千早城へは北條高直以下將卒正に三十萬騎、河内の平野は見渡す限り軍馬と旗幟の海、味方は千に足らぬ小勢ながら、忠義の心金鐵の如く、幾萬の敵も恐れぬ志氣がみなぎつてゐた。その上大將正成は古今の名將で、一度腕を拱ぬけば、無類な智謀軍略が思ふまゝに浮ぶと云ふのですから、將も卒も共に落付き拂つてゐる。

が、敵勢は味方の多勢を賴み、敵の小勢を侮り、城近く迄攻めて來て、

『高の知れたこの城位、一擧に陷れる。』と云ふ意氣込で皆々鬨をつくり、刃を振りかざしながら城壁をよぢ登り

かけたが、ごうしたものか、城中には人の居ない如くに靜り返つて、矢一つも射出さない。

これが正成の謀計とも知らずに、數千の大軍は押しつもまれつ、城の眞下に押し寄せて、斷崖を登りかけた。

「今ぞ、それ切つて放て。」その時正成は大聲に下知をすると、豫て用意をして有つた大木の綱をぷつつ ぷつつと切り放す、と幾十ともなく知れぬ大木が箸かなんぞの様に崖をころがり落ち、群がる敵勢を恰度箒で掃く様に薙ぎ落す、

が、何を云つても大木の幹だから、是れに觸れるが最後

頭も胴も粉微塵になつて了ふ、

「それ引け、敵に謀計が有るぞ。」と呼んでも叫んでも、數千の人には聞えず、續く者、續く者、皆同じ憂き目に遭つて忽ち谷は屍の山、その上驚いて逃げる者には矢を送り、石を投げて仆したものだから、僅の間に、しかも味方の兵は少しも損ぜずに敵を全滅させて了ひました。

北條軍ではそれから、一二度も三度も隊を繰り出して攻めかけたが、その度毎に思ひも寄らぬ計略に面喰はされて、驚き逃げる所を同じく矢や石で仆され、只無闇に兵を損するばかりで、城の一角を潰すことも出來ませぬで

した。

其處で一時戰を休み、城を遠卷にしたまゝ日を送つてゐましたが、正成は此度は此方から一つ出て驚かしてやらふと、何か一思案初めました。

或る朝、未だ明け切らぬ頃城外、北條勢の陣近くにごつこ鬨の聲が擧がつた。

「それ、敵が擊つて出た。」

「城兵が出て來たぞ、それ擊つて了へ。」と云ふので大騷ぎ、素早く劍を採り馬に乘つて攻めかけると、城兵は矢を飛ばせ北條軍を射落しながら退却をする、そしてふと

森の中に入つて了ふと、そのまゝ鳴を鎭めて行き方が知れずなりました。

敵兵はその後を追つて森を駈け拔けると、遙の方に城兵が立つて此方へ弓を引いてゐるのを見出した、

「おやあんな所に居るぞ、それ斬つて了へ。」

と一同はごつと馬を飛ばせて近付いたが、此度は逃げやふとせぬ。

「己れ生命知らず奴。」そう云つて進みざま太刀で斬り付けるこ、その城兵は一言も云はずに仆れました。

「不思議な有樣だ。」と互に顏見合はせ、調べて見るこ、

ごれも此れも藁人形に甲冑を着せた作りもの、これには
すつかり膽を潰して只々呆氣にこられて了ひました。
その時頭上高く、城の中からごつこ笑ふ聲がするので
振り仰ぐこ城兵は手に〳〵弓を張つて一齊に射出したの
で、北條勢は口惜しそうにすご〳〵と陣へ取つて返しま
した。
こんな風で遂に幕府軍はごうしても此の城を陷すこと
は出來ず、
「さて〳〵正成と云ふ人は恐ろしい。」こ舌を巻いて引き
退かねばならなかつたのです。（完）

【23】桶狹間

名所

——愛知縣——

今川義元が、織田信長と戰つて討死をした桶狹間は、尾張の國愛知郡豊明村に在つて、東海道線大府驛から一里半程北東にあたる地點であります。
其處に石碑を建て、是を紀念して有る近くに熱田神宮有り、更に西に名古屋市が有る。日本一壯麗なと云はれてゐる名古屋城は、德川幕府が前田家、加

藤家等二十六大名に命じて築かせたものです。

史蹟

——織田信長——

駿河、遠江の大名今川義元、三河の德川氏を討つて降伏させ、次には尾張の織田信長を討つて、國威を西に伸ばそうと思つた。

その報を聞いた織田信長は大高城その他を固めて、戰鬪準備に餘念がない。

時に永祿三年五月、義元は二萬五千と云ふ素晴らしい大軍を率いて、駿河の本城を出發、先發隊は暴風の様な

勢で、國境の砦を踏み破り尾張の大高城も早や陷ちた。

此の上は信長の本城清洲を一擧に陷れるばかりなので本隊義元の來るのを待つてゐる。

信長は隨分ご心配で有る、軍の報せはどれも此れも思はしくないばかりか、初めから既に少ない軍は、早や半分を失つてゐる。

清洲の城に楯籠つてゐたとて、勝ち誇つた今川の大軍の前には、極めて力の薄いもので有る事は明つてゐる、で遂に必死の覺悟を、部下三千の兵に語らひ、共に死途の盃をかはして出城し、今川の本隊こその國境で戰はふ

こしたのです。

だがその途中、義元は既に大高へ入城したとの報を聞き、非常に落膽したが、又次に味方の斥候が、

『敵の本隊は只今國境桶狹間に差しかゝり、其處で戰勝祝の酒宴をしてゐます。』と云つて歸つた。

油斷、油斷、敵の油斷こそ味方にとつて得難き機會だ十人の油斷をした人を必死を覺悟のたゞ一人で仆すことは安い。

信長は天を拜して喜び、全軍を二隊に分けて、桶狹間に襲ひかゝつた。

折しも一天掻き曇り、さつと吹き降した大風は、忽ち雨を呼んで、篠つくばかりの大雨風となる。

『機こそよけれ。』信長は勇み立つて、約一萬の敵勢の中へ斬つて入る、

忽ち雨中に物凄い修羅場が展開し、鬨の聲、劒の響、人の叫び聲、そんなのが入り亂れて天をも轟かし、地を震はすばかり。

今川勢又よく戰つたが油斷が災ひして遂に崩れ立つた味方の不利を見た御大將義元は、僅に近侍十數人と共に此處を遁れやうと走り出した、大高の城へ入るつもり

です。

だがそれを見た織田勢の桑原甚内、服部小平太、毛利新助の三人、槍を小腋に駒を飛ばせて追駈ける、皆る、

『我こそ敵の大將の首取つて手柄をしやふ。』と思つてゐ

先づ始めに桑原甚内が義元に追ひ迫る、と近侍等は一齊に甚内を圍んで斬りかゝつた、その隙に二番目の小平太が駈け拔けて義元の脇腹へ、ぐさつと一槍見舞ふ、

『己れ。』と義元は刀を拔きざまに斬り下すと槍は中ばから二つになつた。

それと共に義元は馬から飛び降り、横に拂つた太刀先を、小平太は膝頭に受けて、

『あつ！。』と倒れる、續く二の太刀と振りかぶつた義元へ、三番目の毛利新助が組み付き、引き倒し、暫時力を爭つてゐましたが、何を云つても脇腹を突かれてゐるので、剛勇の義元も力弱り、遂に組敷かれて首を斬られた時に義元四十二歲、

新助はその首を太刀の先に突き差し、高く差し上げ、

『毛利新助敵の大將の首討ち取つた。』と驚喜して叫んだ尾張一ケ國の小名織田信長は、義元を討つて忽ちその

名を高めましたが、これがそも〳〵世に出る緒になつたのです。（完）

【24】川中島

―― 長野縣 ――

名所

信濃の國の東部をうるほしてゐる千曲川と、西部を流れてゐる犀川とは丁度、長野市の附近で出合ひ、此處で一流になつて信濃川となつてゐるのだが、此の二つの川の集合點に川中島が有る。

又千曲川の西岸に西條山と云ふのが有つて、此處へ上杉謙信が本陣を置き、川中島を隔て、西側に、信玄の陣所だつた茶臼山が有る。

史蹟

―― 上杉武田の合戰 ――

足利氏の末世、群雄諸々〳〵に割據して武を張り勢を爭ふて戰の絶ゆる間がない、所謂戰國時代で有る。

第百四代後奈良天皇の天文二十年に、信濃の村上義清が、甲斐の武田信玄晴信に攻められて、越後の勢力家上杉謙信輝虎の許へ逃げて來て助けを求めたのが、そもそ

もの始まりで、弘治元年七月に謙信は軍勢を出し義清の領地に入り、川中島で甲斐の軍と合戦をして、見事破つたが敵を追はず、引返して越後に歸つた。

それから互に睨み合つてはゐたが、六年後の永祿四年の秋に、愈々戰期熟して兩軍決戰の場所を、又此の川中島に定めました。

上杉謙信は大變な決心をして、一萬三千の兵を率ひ、千曲川の左岸西條山に本陣を構へる。

武田勢は川中島の西茶臼山に陣を設け、兵を二分し、一萬二千を以つて西條山の敵陣を襲はせ、殘る八千の兵

は信玄自ら司令官となつて川中島で敵の退いて來るのを待ち受けやふ……と云ふ策戰をめぐらせたのです。

だが上杉謙信も中々の名將で、此の敵の策戰を早くも見拔いたものですから、その夜の中に急に兵を集め、「闇にまぎれて今夜中に川中島へ押し寄せよ。」と命令を下した。

其處で全軍は蹄の音をしのばせ、敵に知れぬ樣に西條山を拔け、川中島へ來て陣を布いた。

其の中に夜はほの〴〵と明けて行く、武田勢がふと見ると、何時の間にやら敵の大軍が直ぐ眼の前の川中島に

來て此方を狙つてゐるのですつかり驚いて了つた。

「さては我が計略の裏をかゝれたか。」と信玄は口惜しがつたが、陣を立て直ほす暇もなく、兩軍ごつこ關の聲を擧げて、朝風寒い川中島に大接戰を開始いたしました。

矢に鐵砲に劍に、互に渡り合ひ、斬り合ひ亂れ〳〵て の大激戰に、兩軍の將卒が血の雨を降らせたが、何を云つても甲斐勢の主立つた者は入れ違に、蛻の殼西條山へ攻めて行つて留守になり、後には僅八千の軍しか居らず その上不意の襲來だつたものだから 充分の備も出來ず、段々斬り詰られて敗け色が見えたが、御大將信玄の旗下

は未だ崩れない。

謙信はいら立つて來た、時間が延びるこ、西條山へ向つた敵の本隊が此處へ取つて返して來るに違ない、そうなれば大變味方に不利である事を思つたからです。

永年睨み合ひ、雌雄を決しやふと機を待つてゐた信玄が今眼の前に居ながら、此れに手を下すこの出來ないのを、もごかしく思つた謙信、聽てきつと決心する所が有り、矢庭に胄を脫ぎ捨て白絹で覆面したかと思ふこ、腰なる名刀きらりと拔き放ち、ばつこ砂を蹴つて駈け出した。

この有様を見た近侍の數名は、大將の身を氣遣つて同じく白刃を拔き、その後を追つて馬を飛ばせる。

敵味方の双を合はしてゐる中を一散に馳せて來た謙信、信玄の旗下に來て見ること、同じ服裝をした者が五六人もずらりと並んで居るので、何れが目差す信玄か見さかひが付かぬ。

「信玄殿、勝負を決せん。」と謙信は血眼になつて呼ばはる、

「此の狼狽者奴、信玄殿は此處に居給はぬわい。」そう云つて謙信目掛て槍を突き出したのは虎昌と云ふ甲斐軍の

一方の旗頭です。

謙信がその穗先をかはしてゐる所へ、謙信の家來が追ひ付いて來て、物をも云はず虎昌に斬つてかゝる。其處此處に斬り合が初つて本陣は俄にごよめき立つた。

その隙にひらり馬に乘つて此處を遁れやふとする一騎目早く見付けた謙信はこれこそ信玄だらふと思つて後を追ひ、

「敵に脊を見せるとは卑怯だ、返し給へ。」と呼はる。

正しくそれが信玄だつたのだ。信玄はそう云つて呼ばれると、

「おー」と應えて馬の首を立て直し、振り返る處をさつと斬り下した謙信の双に、刀拔き合はせる暇もなく、持つた軍扇でかつちと受け留めたが、勢餘つていさゝか小手を斬られた。

續いて謙信は一の太刀をあびせ掛け、信玄の肩先をしたゝかに斬つた、續いて三の太刀をと見えた時、此處へ飛んで來た虎昌が槍で謙信を打ちそこなつてその馬を打つた。馬は驚いて跳ね上ると、そのまゝ砂を巻いてひた走る。

その間に信玄は家來に助けられて何方かへ身を隠しました。

したので、謙信は遂に敵將を討ち果すことが出來ず、一先づ陣所へ引き返さねばなりませぬでした。

月すめばなほ靜なり秋の海　　謙信

（完）

【25】本能寺

名所

織田信長が明智光秀に殺された本能寺は京都市に在る。

又光秀の本城阪本城は琵琶湖の岸大津市の北、阪本に在りました。

史蹟

——明智光秀——

天正十年（紀元一二四二年）六月二日の明け方、光秀は中國へ向ふのだと云ひなして集めた三萬の兵を以つて突然本能寺を襲ひ、主君織田信長を討つたのは名高い話だが、何故そんな事になつたか、その原因を詳かにして置きませふ。

一、光秀は戰功に依つて信長から近江一帶を下されたが更に天正六年に丹波の國をも加へられた。處が丹波に三四の諸豪族が割據して伏さないので、光秀は此れ等を片端から攻め從へにかゝつたが、中に八上と云ふ所に居た

豪族秦秀治、秀尚の兄弟は強くて容易に降らない、光秀は大分もてあましたと見え、母親を人質に送つて敵意の無い事を保證し、秦兄弟を招き寄せて仲なほりを計つたそしてほゞ握手が出來たので、二人を伴ひ安土の城に行つて、信長に事の仕末を話したが、信長はそれを承知せずに秦兄弟を殺して了つたのです。

これを聞いた八上の城では忽ち大騷動が初まり、光秀の母を燒き殺した。

幾ら國を貰つても、城を貰つても、たつた一人しかない母を失つたのは口惜しく、こんになつたのも信長の

狹い慈悲の無い心からだと云ふので、光秀は私かに信長を恨みました。

二、その后天正十年に徳川家康が安土の城に信長を訪ねて來た時、その接待役を光秀に仰せ付けました。

光秀はそこで一生懸命に丁寧に色々と手を盡して準備をしましたが、それが餘り立派過ぎたのが信長の氣に入らず

「お前は直ぐに中國へ秀吉の援軍となつて行け、行つても萬事秀吉の命令に從ふのだぞ。」と云つて、折角苦心をした接待の役を取り上げられたので、元來が氣短の光秀

は怒と恨に燃え、坂本城へ歸る途中、饗應に用ひやふ爲に用意した器物を皆琵琶湖へ投げ捨て、城中の一室に籠つて物思ひに沈んでゐた、が此の時既に決心を固めたものです。

三、これより少しく前になるが、甲斐の武田氏を討つて滅した時に、その祝宴を開いたが、その席上酒をたしなむ光秀に強いて飲ませ、興に乘つて信長は光秀を膝に敷き、その頭を皷だと云つて打つた事が有りました。

幾ら家來だと云つても、一國一城の主を滿座の中で恥しめたのですから、信長は冗談のつもりであつても、光

秀は如何にも無念で有つたに違有りませぬ。

こんなことが何や彼と重つた處へ、中國進軍の命令をされて、いざ兵を集めて見ると三萬もの大軍になつた。

秀吉は遠く中國で對陣してゐて近くに居ないし、信長は何の軍備もなく、本能寺に宿つてゐる、得難い好機で都合よく行けば天下を取る事も出來そうに見えてゐました。

で愈々途中、

『敵は本能寺に在り。』と叫んで味方の將卒を驚かせ、本能寺を襲撃すると云ふ考になつたので有ります。（完）

[26] 賤ケ嶽

名所

賤ケ嶽の古戰場は近江國伊香郡伊香具村に有つて、北陸線長濱の北、木の本と云ふ小驛から卅町西の地點です。

此處は柴田勝家と、秀吉の戰つた跡で、賤ケ嶽の七本槍と云へば誰知らぬものはない。

——滋賀縣——

史蹟

——豊臣秀吉——

本能寺に於ける信長の變を聞いた羽柴筑前守秀吉は、備中に戰ひ中で有つたが、急に毛利氏と和睦をして取つて返し、山城の山崎で光秀を討ち主君の仇を報じましたが、それと共に天下の實權は全く秀吉の手に握られた樣に見えました。

織田氏の家臣で、鬼柴田こと云はれた豪勇の將、柴田勝家、並に瀧川一益等は、それを快くは思はず、信長の末子信孝を以て信長の後目こすると宣言して、その兄信雄を立て樣とした秀吉に楯を突いた。

天下の諸將は此のごちらかに組して、茲に日本中の主

だつた勢力は二分されました。そして遂に天正十一年二月、雪の中を勝家は北ノ莊城（福井市）を出發して南進し賤ケ嶽の近くの高地に陣を張る、秀吉は瀧川一益を伊勢の長島に攻めてゐたが、此の報に取るものも取り敢えず近江に入り北に進んで賤ケ嶽を挾んで勝家の軍と對陣する。

諸豪族は又此の附近に陣を張つて見物してゐる、勝ちそうな方へ附かふとしてゐる人も有る。

そんな風で二ケ月睨み合つてゐたが、漸く雪の溶けた頃、岐阜城の信孝が兵を擧げて秀吉の背後を討たふとす

る色が見えたので、秀吉は怒つて自ら岐阜城に向ふ。

その隙に勝家の臣佐久間盛政と云ふ猪武者が、留守を守つてゐる秀吉の陣へ衝きかゝり、見事に砦を占領して其處に留まつた。勝家は再三使を送つて、

『直ぐに引上て歸れ、その砦は敵陣の中に有つて袋の中の様なものだから危ない。』と云つてやつたが、勝戰で少しく慢心してゐた盛政は、

『今に秀吉の首を土産にして歸ります。』と云つて動かない、一方秀吉は此の通知を途中で受けたものだから、猶豫はならぬと直ぐ兵を返して突然に盛政に奪はれてゐる

砦を襲つた。

で遂に激しい肉迫戰が開かれる、じつと永い間、時機の來るのを待つてゐた周圍の諸將は一時にごよめき出して盛政を圍み討にし始め、盛政は全く窮して了ふ、この有樣を見た勝家は家臣を見殺しには出來ぬので、

『はやこれ迄。』と決心をし、

『進め、進め。』と激しく下知をする、で此處に賤ケ嶽を中心にして大修羅場、大爭鬪の幕が切つて落されました

此の大亂鬪の中に秀吉の家來加藤清正、福島正則、片桐且元、加藤嘉明等七名のいづれも血氣にはやる若武者

が、手練た槍をひねつて敵を仆し、踏み破り、敵の勇士數多く討ち取つて天晴の手柄をたてました。後世此の七人を呼んで、賤ケ嶽の七本槍と云つて武功を賞めてゐます。

盛政討死をし、勝家はわづかに一方を斬り抜けて本城北ノ莊城に歸り、此處に楯て籠りましたが、秀吉の軍に圍まれて遂に天正十一年（紀元二二四三年）四月、自ら城に火を放ち、家臣一族諸共に立ち登る火炎に悲壯な最期を遂げました。

夏の夜の夢路はかなきあとの名を

雲井にあげよ山ほとゝぎす　勝家

（完）

【27】名護屋城址

名所

筑前の東松浦郡名護屋村、海岸の勝尾山上に、文祿の頃秀吉が朝鮮征討の大本營とした名護屋城が有ります。日本國内殘る隈なく平定して了つた秀吉は、次に大明（今の支那）をも征服しやふとしたが、軍隊を送る爲に朝鮮を

福岡縣

通らねばならぬ所から、その承諾を受けやふと朝鮮王に手紙を遣つたが、朝鮮は明の味方をしたので、先づ朝鮮を討つ事とし、京都では司揮に不便だから、急に名護屋に城を築かして、大本營としたのです。

史蹟

——加藤清正——

秀吉の朝鮮征伐は、第一回は文祿元年で、總出動、兵數二十六萬と云ふ大軍で、加藤清正、小西行長、宇喜田秀家等の惡戰苦鬪で見事勝利を得て媾和となつたが、敵

國から寄越した媾和文中に、

秀吉を日本の國王と爲す

と云ふ失禮極まる文章が有つたので、秀吉は眞赤になつて怒り、茲に再度軍を差し向けた、是れが慶長二年で紀元二千二百五十七年にあたります。

が此度の戰爭は以前より困難で、敵も準備が出來てゐたので、實に辛酸を嘗めました。

その時、勇猛な清正は蔚山を征め落し、城に淺野幸長を留めて置て、更に機張と云ふ所へ出掛てゐましたが、

「蔚山は今敵の包圍を受けて危くなつてゐる。」

との報を受けたので、清正は取るものも取り敢えず城に入らふとしました。

だがそれは甚だ危險な事で、家臣等は口を揃へて引き止めましたが、清正はどうしても聽き入れませぬでしたそれには理由が有ります。

初め日本を出る時、淺野幸長の父は清正に、

「力と思ふのは貴下だけです、どうか息子をお賴み申す」と云つて幸長の身の上を賴んだ、その時清正は、

「命にかけてもお守りいたそう。」と約束をしましたので義に固い清正は幸長を見殺には出來なかつたのです。

で骨も凍らんばかりの寒さを物ともせず、急に蔚山に引き返し、是を包圍する敵にあたつたのです、然し敵は地理にも明るくその上兵多く、味方は慘々な苦戰だつたが漸く味方の諸將が應援に來たので、忽ち局面は一變し、敵の死傷約五千、殘る兵は刀を擔いで逃げて了つた。

それから更に泗川の大戰で大勝し、敵兵三萬五千の首を斬つた。

此んなに澤山の兵を討つた事を秀吉に見せたいが、四萬もの首を日本へ送るのは大變な譯で、此處に一策を案じ、その鼻や耳を斬り落し、是を大樽十個に詰め、まる

で乾魚の輸出の様にして内地へ送つたのです。

此んなお土産が度々秀吉の手許へ集つて來る、秀吉は是等を京都の効外に埋めて耳塚と云ひました。

此の耳塚は今にそのまゝ遺つてゐます。（完）

【28】大阪城

名所

——大阪府——

大阪城は、豊臣秀吉が費用を惜まず、出來るだけ豪壯なものをとて築いたもので、城壁の大石は、瀬戸内海中の島

又は、沿岸から集めたのだと云ふ。當時城内には豊國神社が有り、社内に秀吉の銅像が立つてゐましたが、明治になつて中之島に移されました。

史蹟

——徳川家康——

大阪城は秀吉の沒後、秀頼、淀君外豊臣家の重臣が楯籠り、徳川方を敵手に最後の戰をした所だが、家康と云ふ人は上杉謙信とか武田信玄の様な武俠の人ではなく、眞に驚く程才智に長けてゐて、物事を急がず靜に時機を待つて、敵が自然に自滅するやふに、策を廻らすと云つ

た風なやり方をする人でありましたが、中にも大阪方、つまり豊臣家の滅亡を計つての策略等は、實に用意周到なもので有りました。

天正十四年に秀吉が建てた、方廣寺と云ふ寺院が慶長の大地震で潰れたまゝになつてゐたのですが、秀吉の沒后家康は淀君に此の再建を勸めました。その表面の理由は秀吉の冥福を祈る爲だと云ふのだが、實意は此んな事に金を費させて、大阪方の資力を減じて置かふとの謀計である事は、

心ある家臣達にも分つてゐました。

淀君は片桐且元を普請奉行として再建に取りかゝり、數年の日數と、多額の費用とを費してやつと建長十九年四月に落成しました。

所がその寺の鐘に刻んだ「國家安康」の文字は家康の二字を、安の字で二分し、その生命を呪つたものだと云ひ出した。

思ひも設けぬ大事に、且元は早速辯解しやふと駿河に行つたが、家康はどうしても逢はないので、至方なく且元は此地に留つて、八方家康の心の納まる樣にとりなしをしてゐたのです。

その時一方大阪に居た淀君は、又此の話を聞いたので心配な所から、その召使を駿河に遣はして、家康の心を解かふとしたが、此の召使には直ぐに逢つて手厚く待遇し、

「鐘の文字等は別に氣にも留めてゐないから、安神してお歸りなさい。」と事も無げに云ふので使者は喜んで大阪に歸る。

その后に家康は且元に逢つて、

「徳川方と豊臣方との間に戰爭の無い様にするには、第一に秀頼か、淀君のごちらかを江戸に移し、大阪城は明

け渡さねばならぬ。」と云つてそのまゝ座を立つて了ひましたので、且元はしつこ腕を組んで深い考に沈む。

家康の申出は、隨分大阪方にこつて屈辱だが、家康の怒に觸れて、豊臣家を滅ばされてはならぬこ思つたのでそれを承知して心浮かぬながらに大阪に歸つて來る、淀君の許へは先に召使が歸つて、

「御安神なさいませ、大御所(家康の事)はあの鐘の事なんかちつこも心に掛けてはゐらつしやいませぬ。」と云つてゐるのに、此度聞けば且元は勝手に大阪方の屈辱になる様な事ばかりを承知してゐる、これはきつと且元の不

忠心から主を賣り、且元自らが大阪方の權力を握らふとしてゐるに違ない、と誤解をしたので、淀君は大いに怒り、

『あの不忠者の且元を討つておしまひ。』と命ずる。

時に木村重成は此の由を知つて驚き、且元に内通したので、且元は家族を引き連れて、その本城で有る茨木の城へ退いた。

生命は惜しくないが、今風前の燈の様になつてゐる大阪方を、毒蛇のやふな家康の手から救ふ者は且元をおいて外にない、と自ら信じてゐるので一度遁れたのだが、

これ以後淀君と且元との間は不仲になつて了つた。

が是は家康の豫の計圖で、今大阪方に思慮分別有つて、家康の策略の裏を見すかそうとする者は、且元獨りなので、どうしても、此の且元を淀君の許から去らさねばならぬと思つたのが、うまく成就したのだから、家康は蔭で手を叩いて喜んだに違ひありませぬ。

大阪城では且元が承諾して歸つた條件を承はず、その代り籠城を覺悟して兵を集め初めたので家康は、大阪方から戰を挑まれたから、至方なく相手をするのだと云ふ風に見せて、大阪城を圍んだ。